

# 永田遺跡

(高知県長岡郡本山町)

1995. 3

本山町教育委員会

# 永田遺跡

本山町埋蔵文化財調査報告書第7集

1995. 3

本山町教育委員会

巻頭カラー 1



## 序

私達の郷土本山村は早くより嶺北地域の中心地として栄え、有形無形の貴重な文化遺産や偉大なる先人の輩出で今日において教育と文化の町を誇りとしている。

その歴史を綴るかのように、松ノ木遺跡（縄文後期大規模集落群）の発掘等に続く永田遺跡は畿内文化との深い繋がりが実証され、正に四国の交流の拠点的な位置であったことを裏付けた。この地は、嶺北高校敷地造成工事中にも大量の土器が発掘されたところで、農耕、漁業にも適したことによって発掘は注目がされていた。

国道439号線と一級河川吉野川に挟まる交通の要衝で利便、商業性を兼ね備え、嶺北高校校門新設工事、四国銀行本山支店移転工事が相次ぎ、緊急発掘となったものである。

調査は、四国銀行本山支店移転地1,000m<sup>2</sup>で実施され、竪穴式住居二棟、貯蔵穴、弥生後期の土壙墓一基のほか大阪、徳島で製作した土器が大量にみつかり、この地が畿内と本県太平洋沿岸地域とをつなぐ拠点であったと思われる。

四国銀行の全面的協力と施工業者の理解、高知県教育委員会文化振興課の支援、岡原恵三係長をはじめ埋蔵文化財に感心をもつ町内外の有志の御協力によって大きな成果をあげることができました。

特に最終段階をむかえての直径1.2m、深さ60cmの貯蔵穴から完全な形での土器約20点がみつかったことは理想的な発掘体系と関係者の協力の賜だと感謝の気持ちでいっぱいあります。

この調査に御協力いただきました皆様に深く感謝申し上げますと共に、今後この報告書が考古学上貴重な参考資料として活用され、埋蔵文化財に対する人々の認識が深まるよう念じます。

平成7年3月7日

本山村教育委員会

教育長 和田聖寛

## 例　　言

- 1 本書は、本山町教育委員会が平成6年度に実施した四国銀行本山支店の店舗移転に伴う永田遺跡の緊急発掘調査報告書である。
- 2 永田遺跡は、高知県長岡郡本山町本山字永田に所在する。
- 3 発掘調査は、試掘調査を平成6年6月10日に行い、本調査を6月14日から6月24日まで実施した。試掘調査は900m<sup>2</sup>を対象として行い、本調査は400m<sup>2</sup>について行った。
- 4 調査体制は以下の通りである。

(1) 調査員

出原恵三（高知県文化財団埋蔵文化財センター　調査第3係長）

佐竹 寛（　　　　同　　　　　　　主任調査員）

藤方正治（　　　　同　　　　　　　調査員）

(2) 事務担当

右城 誠（本山町教育委員会　主事）

- 5 本書の編集は、出原が行い、執筆については下記のように分担した。

第1章　調査に至る経過　（出原）

第2章　遺跡周辺の歴史的環境　（佐竹）

第3章　調査の成果

1　調査の方法と基本順序　（出原）

2　弥生・古墳時代の遺構と遺物

(1)　堅穴住居　（藤方）

(2)　土　坑　（佐竹）

3　中世以降の遺構と遺物　（佐竹）

4　包含層出土の遺物　（出原）

第4章　考　察　（出原）

観察表　（佐竹）

- 6　遺物整理・図面作成等の作業においては、埋蔵文化財センターの下記の方々の協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

大原嘉子　岡村真由紀　山中美代子

- 7　現場での発掘作業は、地元本山町の方々の献身的な協力を得ることができた。記して感謝の意を表したい。

- 8　最後に、この発掘調査を遂行できたのは、四国銀行の埋蔵文化財に対する理解と協力、わけても本山支店長山本 亮氏のきめ細かなご配慮の数々があったこと、並びに工事責任者関西土木株式会社が調査に際して種々便宜を図って下さったことに負うところが大きかったことを銘記し、感謝の意を表したい。

## 本文目次

第Ⅰ章 調査に至る経過 .....	1
第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境 .....	2
第Ⅲ章 調査の成果 .....	4
1. 調査の方法と基本層序 .....	4
(1) 調査の方法 .....	4
(2) 基本層序 .....	5
2. 弥生・古墳時代の遺構と遺物 .....	9
(1) 積穴住居 .....	9
(2) 土坑 .....	11
(3) 集中出土地点の土器 .....	17
3. 中世以降の遺構と遺物 .....	22
(1) 土坑 .....	22
(2) ピット出土の遺物 .....	24
(3) 包含層出土の遺物 .....	25
第Ⅳ章 考察 .....	29

## 図版目次

- |   |                                |
|---|--------------------------------|
| Fig. 1 水戸遺跡の位置と周辺の遺跡分布図                 | Fig. 14 SK 13・14実測図            |
| Fig. 2 調査区位置図                           | Fig. 15 SK 32遺物出土状況実測図         |
| Fig. 3 調査区及び基本層序位置図                     | Fig. 16 SK 32平面図及び断面図          |
| Fig. 4 基本層序                             | Fig. 17 SK 32出土遺物実測図           |
| Fig. 5 検出遺構全体図                          | Fig. 18 SK 32出土遺物実測図           |
| Fig. 6 ST 1 実測図及びセクション図                 | Fig. 19 SK 32出土遺物実測図           |
| Fig. 7 ST 1 出土遺物実測図                     | Fig. 20 SK 33及び出土遺物実測図         |
| Fig. 8 ST 2 出土遺物実測図                     | Fig. 21 集中地点出土遺物実測図            |
| Fig. 9 ST 2 遺物出土状況実測図, ST 2 実測図及びセクション図 | Fig. 22 SK 20出土の石錐実測図          |
| Fig. 10 SK 1～5・9・10実測図                  | Fig. 23 SK 8・12・17～20・23・30実測図 |
| Fig. 11 SK 2・3・11・13出土遺物実測図             | Fig. 24 SK 23・12出土遺物実測図        |
| Fig. 12 SK 11実測図及びセクション図                | Fig. 25 ピット出土遺物実測図             |
| Fig. 13 SK 11出土遺物実測図                    | Fig. 26 包含層出土遺物実測図             |
|   | Fig. 27 包含層出土遺物実測図             |

## 写真図版目次

- |                                    |   |
|------------------------------------|---|
| P L 1 : 試掘調査（西から）・同（南から）           | P L 14 : 調査区東半分完掘状況（北西から）・<br>同上（南から）                           |
| P L 2 : 東区北壁セクション                  | P L 15 : 調査区西半分完掘状況（南東から）・<br>発掘調査状況                            |
| P L 3 : 東区西壁（N-S）セクション             | P L 16 : ST 2 (5～8)・SK 32 (67)・包含層<br>(83・97) 出土の遺物             |
| P L 4 : SK 1 セクション・同完掘状況           | P L 17 : ST 2 (15)・SK 3 (21)・SK 11 (20)<br>・SK 32 (27～29) 出土の遺物 |
| P L 5 : SK 3・SK 4 完掘状況             | P L 18 : SK 32出土の遺物   |
| P L 6 : SK 5 半截状況・SK 9 完掘状況        | P L 19 : SK 32 (47～50)・集中地点 (70・71)<br>出土の遺物                    |
| P L 7 : SK 11完掘状況（南から）・同（東から）      | P L 20 : SK 32 (52・63)・SK 13 (95)・包含層<br>(93) 出土の遺物             |
| P L 8 : SK 11セクション                 | P L 21 : 石器・同裏面   |
| P L 9 : SK 17完掘状況・SK 18半截セクション     |   |
| P L 10 : ST 1 完掘状況・ST 2 完掘状況       |   |
| P L 11 : SK 32遺物出土状況（上層）・同上（中層）    |   |
| P L 12 : SK 32遺物出土状況（中層）・SK 32完掘状況 |   |
| P L 13 : SK 33検出状況・P 13半截状況        |   |

## 第Ⅰ章 調査に至る経過

平成6年6月1日、本山町教育委員会より高知県教育委員会文化振興課に四国銀行本山支店の移転計画が具体化しつつあるとの連絡が入った。移転地である本山町本山字永田749、751-1は周知の遺跡とはなっていないが、移転地に北接して嶺北高校校庭遺跡が所在している。当遺跡は、昭和30年代に発見された弥生時代中期から古墳時代にかけての集落址であり、発見以来今日に至るまで同校校庭内ののみを遺跡の範囲として登録してきたところである。しかし地形的な状況から見て、当遺跡は周辺に広がっていることが十分に考えられることから、文化財保護部局としては、少なくとも確認のための試掘調査が必要であるとの判断に立ち、本山町教育委員会及び高知県教育委員会は、四国銀行との協議に入った。四国銀行移転地が周知の遺跡として登録していなかったこと、工期の関係などから立会調査の実施を主張されたが調査の方法については、試掘調査の結果を待ち、その判断は文化財保護部局に一任してくれるようお願いし、一応の了承を得ることができた。

これを受けた本山町教育委員会は、県教育委員会の協力を得て6月10日に試掘調査を実施した。その結果、移転計画地900m<sup>2</sup>のうち北側部分の約400m<sup>2</sup>余りについては、弥生時代から中世にかけての遺物包含層が残っていることが明らかになり、ピット状の遺構も数個検出した。南側部分については、旧地形が下降していることもあって遺構等の存在はないものと判断した。したがって、本山町教育委員会と県教育委員会は、移転予定地内の遺物包含層及び遺構の存在が確認された北側部分の約400m<sup>2</sup>については記録保存のための本格的な発掘調査が必要であるとの判断に立ち、その旨四国銀行に通知すると共に協議に入った。その結果四国銀行からは、埋蔵文化財の重要性に鑑み記録保存のための緊急発掘調査については、全面的な協力体制で臨むとの回答をえることができた。

本調査は、遺跡に支障のない南側の工事と併行して6月14日から開始する運びとなり、調査の実施については高知県文化財団埋蔵文化財センターが担当することとなった。



調査終了後の永田遺跡（四国銀行本山支店）

## 第Ⅱ章 遺跡周辺の歴史的環境

永田遺跡のある長岡郡本山村は、四国のほぼ中央部、高知県の最北部に位置し、近隣の5ヶ町村と共に嶺北地方と呼ばれており、最も遺跡の集中するところである。町のほとんどは山林で占められているが、町を南北に2分して蛇行する吉野川流域にあって唯一肥沃な河岸段丘を形成し、人々に生活と生産の場を提供している。この吉野川は四国最大の河川であり、下流域において徳島平野を潤している。近世以降は、四国山地で伐採した「御用材木」の搬出路として利用されたことからも窺えるように東からの文物流入の動脈としての機能を果たしてきている。また本山村は、瀬戸内と太平洋側を結ぶ中継地点でもあり、東西・南北からの情報のクロスする地点でもある。このような地理的環境が本山村の歴史と文化の形成に重要な役割を果たしている。

本山村の歴史は長徳寺遺跡の調査によって、縄文時代早期にまで遡ることが確認されており、以後縄文時代を通して連続と人々の生活のあとをたどることができる。当地域は、県下において西部の四万十川流域とともに、縄文時代遺跡の最も集中しているところである。長徳寺址からは縄文早期の葦島式土器と、高知県では初出土の大形彌円形押型文土器である高山寺式土器が出土している。また、2個の石錘も出土しており、土佐の網漁業が縄文早期まで遡ることが明らかになった。松ノ木遺跡は、1~3次の発掘調査が実施され、多大な成果を挙げている。とりわけ、松ノ木式土器と命名された縄文時代後期の土器は、今や全国的に著名な土器型式となり、松ノ木式土器文化の内容をめぐって当地域が俄に注目されつつある。このように当地域は、縄文時代の遺跡の希薄な中・東部にあっては最も充実した内容をもつ地域として重要な位置を占めている。

弥生時代は、中期末から遺跡が分布し始め、後期末~古墳時代初頭に至って爆発的な増加を見せる。北接する嶺北高校校庭から凹線文の壺・高杯と太型蛤刃石斧が出土しており、西方の銀杏の木遺跡からは、堅穴住居址状遺構、貯蔵穴などの遺構が検出されると共に、ヒビノキII式土器併行の銀杏ノ木式土器やこれに伴って打製石包丁が3点、石錘等が出土している。<sup>(1)</sup>また、堀ノ尻遺跡は、弥生時代末から平安時代にかけて営まれた遺跡であり、8世紀末から9世紀前半に属する須恵器が主体を占めている。なかでも注目すべき遺物として、縁釉の壺を挙げることができるが、これは当地域では初めての出土であり、今後、周辺部を含めた当遺跡の性格付けを考える上で重要な資料となるものである。<sup>(2)</sup>また、先に挙げた松ノ木遺跡からは、弥生時代後期終末から古墳時代初頭の堅穴住居址が10棟発見されており、その中からは岡山や徳島で作られた土器が出土しているが、当時の地域間交流の在り方を如実に示すものとして注目されている。<sup>(3)</sup>

### 註

- (1) 岡本健児他 「長徳寺址発掘調査報告書」 高知県長岡郡本山村教育委員会 1977年
- (2) 出原恵三・前田光雄 「松ノ木遺跡 I」 高知県長岡郡本山村教育委員会 1992年
- (3) 岡本健児 「嶺北高校校庭出土の遺物群」 前誌註(1)
- (4) 岡本健児 「銀杏の木遺跡の発掘」 高知県長岡郡本山村教育委員会 1984年
- (5) 出原恵三 「堀ノ尻遺跡」 高知県長岡郡本山村教育委員会 1993年
- (6) 出原恵三 「松ノ木遺跡 II」 高知県長岡郡本山村教育委員会 1992年



No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代	No	遺跡名	時代
1	水田遺跡	弥生～中世	9	下津野遺跡	縄文・弥生・中世	17	沖田遺跡	縄文
2	長徳寺遺跡	縄文～中世	10	上奈路遺跡	縄文・中世	18	柄ノ口遺跡	縄文・弥生
3	東久保遺跡	弥生	11	北山瀬ノ上遺跡	中古銅矛出土	19	高笠遺跡	弥生
4	銀杏の木遺跡	弥生～中世	12	松ノ木遺跡	縄文～古墳	20	静岡遺跡	縄文
5	寺家遺跡	中世	13	八反坪遺跡	縄文	21	大畠遺跡(奥遺跡)	弥生
6	東畑遺跡	弥生・中世	14	下田遺跡	弥生	22	鳥井遺跡	縄文
7	天神前遺跡	弥生	15	玉屋敷遺跡	縄文			
8	堀ノ尻遺跡	弥生～中世	16	田井古屋遺跡	弥生			

Fig. 1 永田遺跡の位置と周辺の遺跡

## 第Ⅲ章 調査の成果

### 1. 調査の方法と基本層序

#### (1) 調査の方法

すでに前項でも触れたように、工事予定地の900m<sup>2</sup>に2×2m～2×6mの試掘グリッドを6個所設定した結果、ほぼ北半分から弥生～中世の遺物を含む包含層や一部遺構の存在が認められた。南側半分については遺物がほとんど認められず旧地形が南側に向かって下降していることが明らかとなった。従って本調査は北側400m<sup>2</sup>について実施することになった。

廃土置き場を確保するために調査区を東西に二分し、東側から調査にかかるとした。遺物の取り上げ、遺構実測は磁北にあわせた任意座表を組み、4m毎に杭を打ち南北方向に北から1・2・3・・・、東西方向に西からA・B・C・・・と杭No.をふり、北西隅の杭No.を4m方面の名称とした。現表土及び客土等の堆積が厚かったために遺物包含層の上層までは重機を使って掘削し、

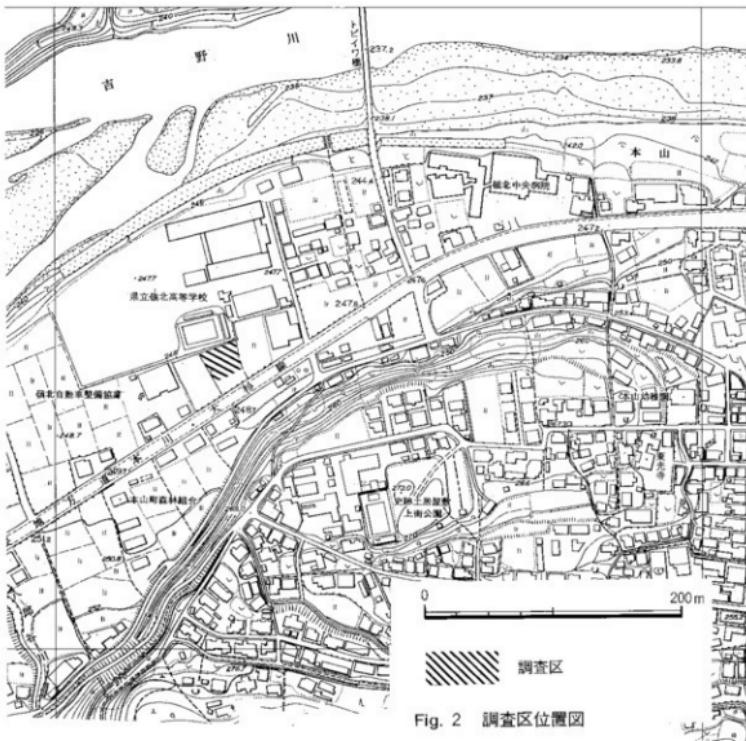


Fig. 2 調査区位置図

それより下層は人力で掘り下げた。遺構の平面及びセクションの実測は20分の1を原則とし、必要に応じて10分の1実測を行った。

## (2) 基本層序

V層：黄色シルト層で地山を形成する。この地域の基盤層であり当調査区では弥生時代の遺構検出面である。南北セクションの中央部よりやや南によった地点で段状になっている。

VI層：明褐色粘質土層で、層厚は8~30cmを測る。弥生・古墳・中世の遺物包含層である。

V層：暗灰褐色粘質土層で、上部にアカホヤ（音地）の二次堆積土を僅かに含んでいる。南北セクションの一部にのみ存在している。

IV層：灰褐色粘質土層で層厚は12~30cmを測る。旧耕作土の可能性がある。南北セクションでしか見られないが、南部は近代攪乱（a層）に切られている。

III層：暗褐色粘質土層で層厚は15~20cmを測る。旧耕作土で南北セクションの南部にのみ堆積している。

III'層：褐色粘質土層で層厚は10~30cmを測る。旧耕作土である。

II層：黄灰色粘質土層で層厚は4~6cmを測る。II層の床土である。

II'層：黒灰色粘質土層で層厚は15~20cmを測る。南北セクションの南寄り3分の1の地点では現耕作土となっている。

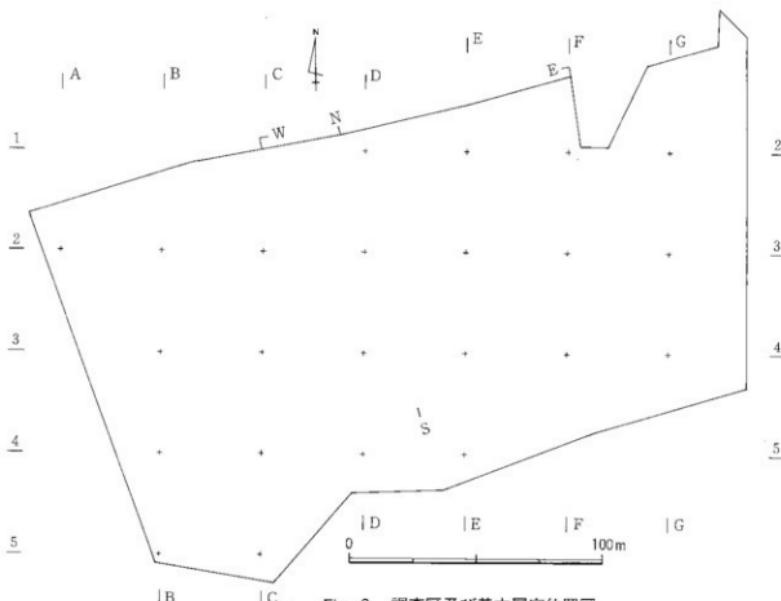
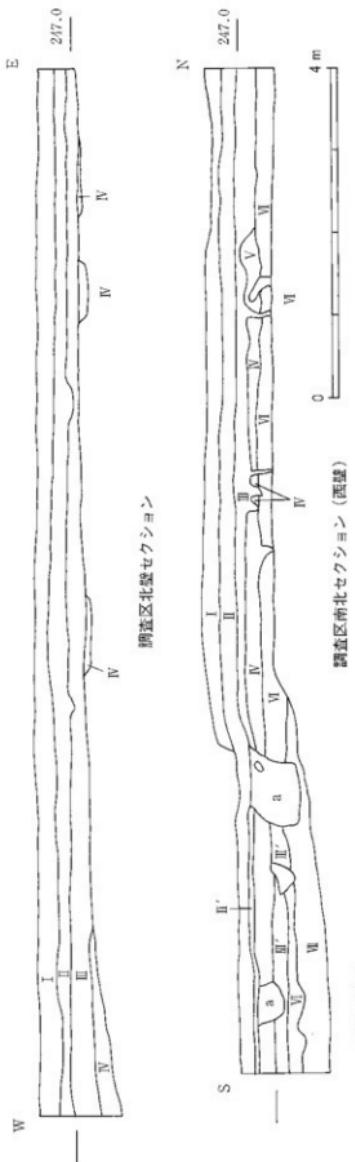


Fig. 3 調査区及び基本層序位置図



- I層：耕作土。
- II層：々。
- II'層：光灰色粘質土 (上部に茶色の斑点を多く含む。旧耕作土)
- III層：褐色粘性土
- IV層：灰褐色粘性土
- V層：暗灰色粘質土 (W層を母体として上部に暗色の斑点を多く含む。旧耕作土)
- VI層：明褐色土 (発生・古須時代の窓含層)
- a : 近代堆积層

Fig. 4 基本層序

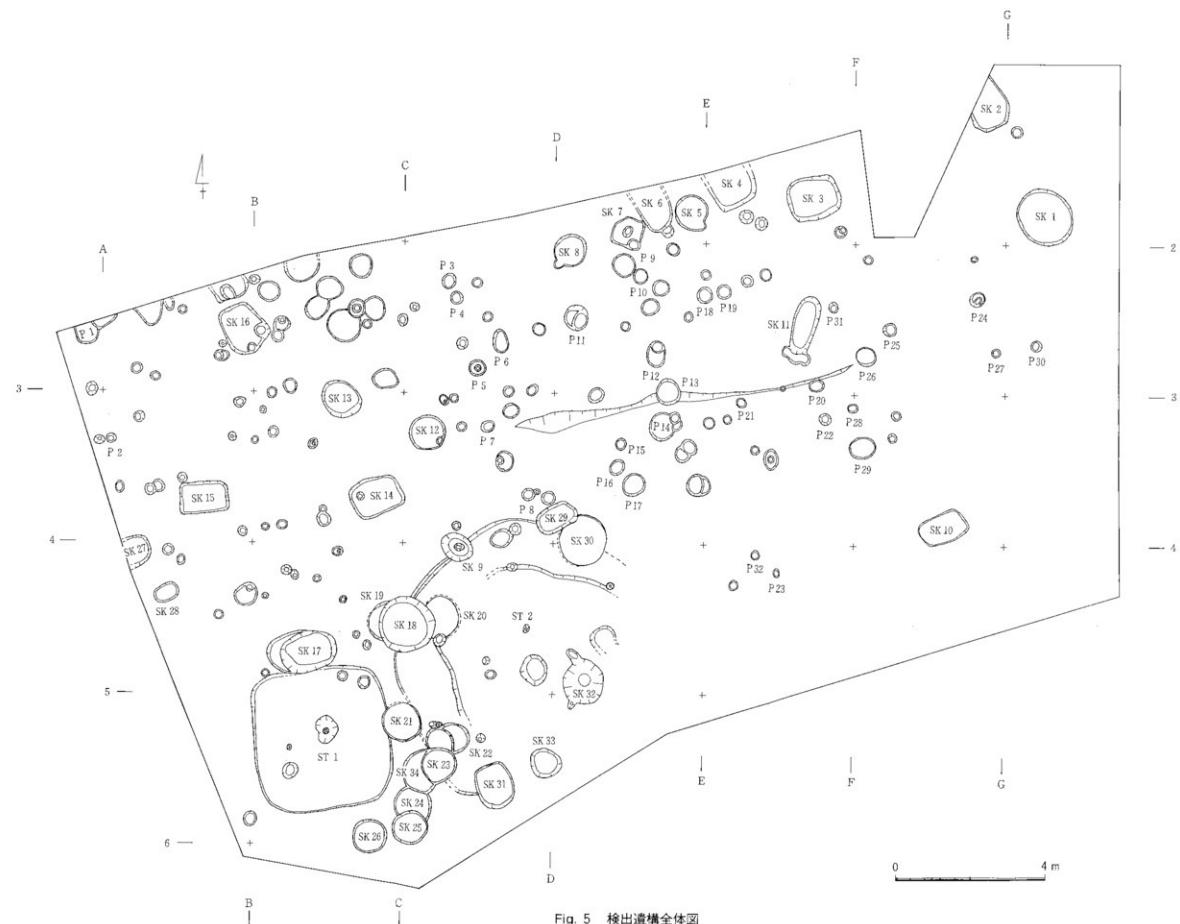


Fig. 5 検出遺構全体図

I層：現耕作土で層厚25~30cmを測る。

南北セクションでは、地山面（VII層）が南に向かって低くなっていることが読み取れる。その変化点は、南寄りの段部であり各層準共にこの変化に対応している。また東に向かってもVII層は下降の傾向を示している。

## 2. 弥生・古墳時代の遺構と遺物

### (1) 壴穴住居

ST 1 (Fig. 6・7)

調査区の西南部で検出された竪穴住跡であり、埋土は主に茶色粘土である。北部と東部に於いて各々中世等の土坑 SK 17, 21によって切られる。南北3m80cm×東西3m60cmの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは12cm~22cmを測る。住跡の中央部に88cm×70cmの不整円形に炭化物と焼土が集中して存在し、この傍らには台石と考えられる河原石が置かれていた。住居に伴う柱穴は4個検出されたが、上屋構造に伴うかは不明確である。

出土遺物は甕と鉢のものであり、細片を主として80点余りであった。図示できるものは1~3 (Fig. 7) の3点である。

1は鉢である。手捏ね成形の小型品で底部は丸底である。2は中央焼土集中部で出土した結晶片岩製の石錘であり、3は緑色片岩製の叩石である。細片中には撒入品と考えられる甕の破片も含まれており、土器以外にはサヌカイトや結晶片岩等の斜離片が見られた。

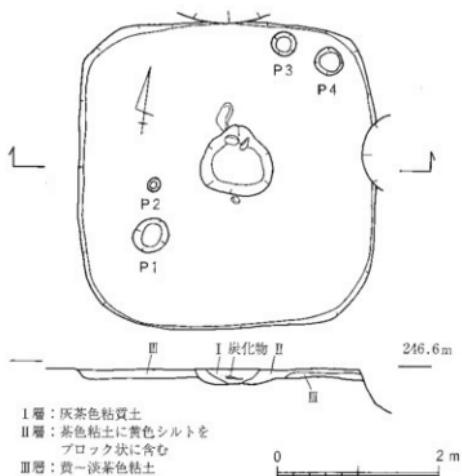


Fig. 6 ST 1 実測図及びセクション図

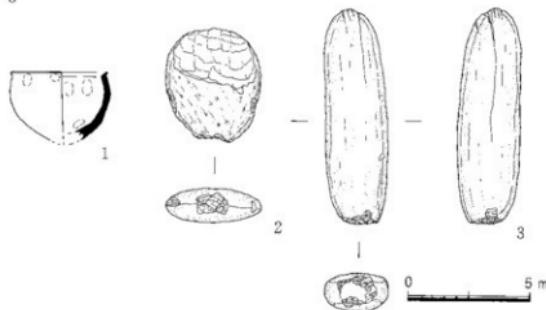


Fig. 7 ST 1 出土遺物実測図

ST 1 の機能時期は僅少な出土遺物から判断し難いが古墳時代初頭と考えられる。

ST 2 (Fig. 8・9)

調査区の中央部南で検出された竪穴住居跡であり、埋土は主に淡茶褐色土であるが上位では遺物を多く含む暗褐色土層が存在した。東北部で SK

29, 30、西部で SK 18, 20、西南部で SK 21, 22, 23, 31の中世等の土坑群によって切られている。又、弥生後期の土坑 SK 32及び縄文時代の可能性のある土坑 SK 9を切っている。東南部は後世の削平を受けており、平面形態は不明確であるが、残存規模6.8m×6.4m隅丸方形又は多角形を成すと考えられる。残存部分に於いては住居壁際から幅1.0m~1.2m、住居床面からの高さ約12cmの版築によるベット部が存在する。ベット部を除去すると壁に沿って、幅8cm、深さ3cmの小溝が検出された。ST 2は2時期にわたるものと考えられる。住居跡の中央部には97cm×81cmの楕円形を呈する中央ピットが存在する。このピットは床面より深さ17cmを測るが、外周には土手状の盛り土部分が存在しており、埋土上部には炭化物と焼土が多く含まれていた。又、この北西方向約1mには台石と考えられる断面楕円形の河原石が床面上に存在した。住居跡の床面を中心に柱穴を12個検出しているが、P 3, 11はベット除去後の検出であり、ベット状遺構構築以前に対応するピットである。ST 2の床面上及びベット上からは炭化物や焼土の出土が著しく、特に炭化木材で残存が良い

P no.	計測値 (cm)	深さ (cm)	平面形態
1	直径 49	46	円形
2	19×16	4	楕円形
3	直径 35	4	円形
4	42×39	7	楕円形

表1. ST 1 ピット計測表

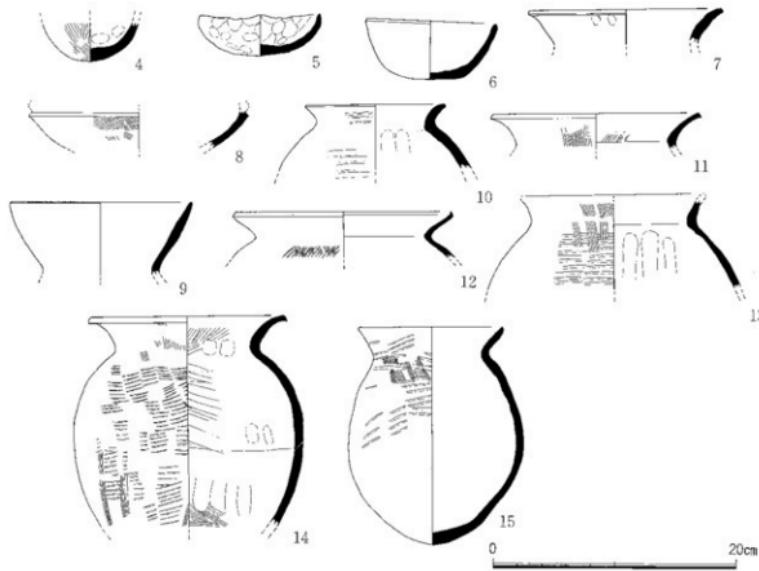


Fig. 8 ST 2出土遺物実測図

ものに於いては住居中心部への指向性が見られる。又、これらの中には角材であったと考えられるものが存在することから垂木等上屋を構成するものであった可能性が高い。

これらのことからST 2は焼却か火災に遭った住居跡と考えられる。

出土遺物は土器破片を主として450点余りであるが、図示できるものは4~15(Fig. 8)の12点であった。4~6は鉢である。4は底部丸底、5は皿状を呈す手擣ねのものであり、6は塊状を呈し、底部は平底を成す。7, 10, 11, 13~15は壺である。12は搬入品であり、河内窯のものと考えられる。7, 11, 13~15はハケ又は叩きのちハ

ケの調整を施すものであるが、10では叩き調整のみを施しており、15は底部丸底である。8, 9は壺である。8はP6出土のものであり、瀬戸内系の赤彩された長頸壺の胴部片である。弥生時代後期初頭のものであることから混入であろう。これらの土器の内13, 14が床面から、5, 12, 15がベット上からの出土であり、6はその部位を床面とベット上から得ている。

ST 2はその機能を古墳時代初頭に於いて終了したと考えられる。

## (2) 土 坑

### SK 1 (Fig. 10)

SK 1は、調査区の東北隅にある。平面形は楕円形を呈し、長軸158cm、短軸140cm、深さ17~19cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、埋土中より弥生土器及び古式土師器の細片が30数点出土しているが、図示できるものはない。古墳時代前期に属する。

### SK 2 (Fig. 10・11)

SK 2は、調査区の東北隅にあり、半分以上が調査区外に出るが、隅丸方形を呈するものと考えられる。断面は舟底状をなす。壁は西側は緩やか、東側は急傾斜で立ちあがり、床面は中央部がやや凹む。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、遺物は古式土師器の細片が60点余りと圧倒的に多くその中にはST 2で示したように、明らかに河内からの搬入品であるものも含まれている。また、繩文土器片や弥生後期末の重口縁壺(16)も出土している。須恵器の細片から6世紀頃の遺構と考えられる。

### SK 3 (Fig. 10・11)

SK 3は、調査区の東北部にある。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸140cm、短軸112cm、深さ25~29cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は西側に向けて低く傾斜している。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、遺物は埋土中より、弥生終末と古式土師器の細片が350点、床からも壺の大片(21)が出土している。

P no.	計測値 (cm)	深さ (cm)	平面形態
1	44×37	56	楕円形
2	直径 39	22	円形
3	33×26	30	楕円形
4	79×(58)	9	タ
5	(49)×23	37	タ
6	(28)×21	55	タ
7	直径 33	13	円形
8	28×23	21	楕円形
9	39×21	22	タ
10	26×21	46	タ
11	直径 22	56	円形
12	直径 28	34	タ

表2. ST 2 ピット計測表

\* ( ) 内の数値は残存値。

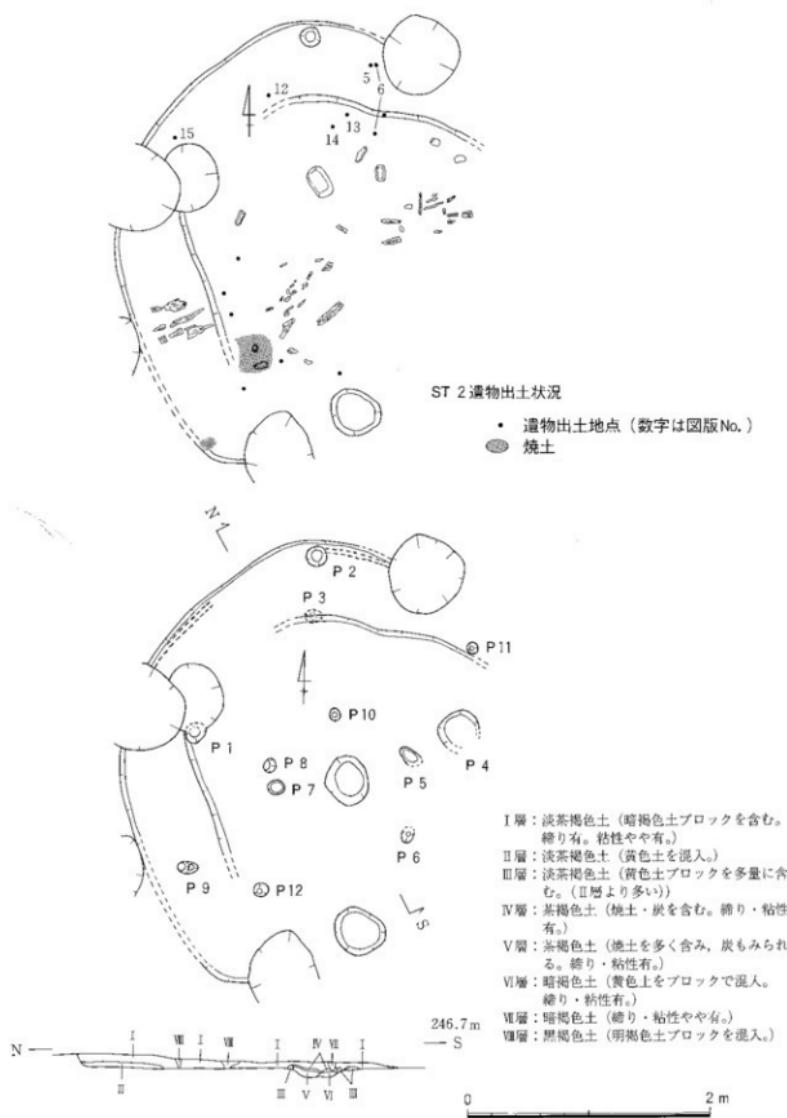


Fig. 9 ST 2 遺物出土状況実測図, ST 2 実測図及びセクション図

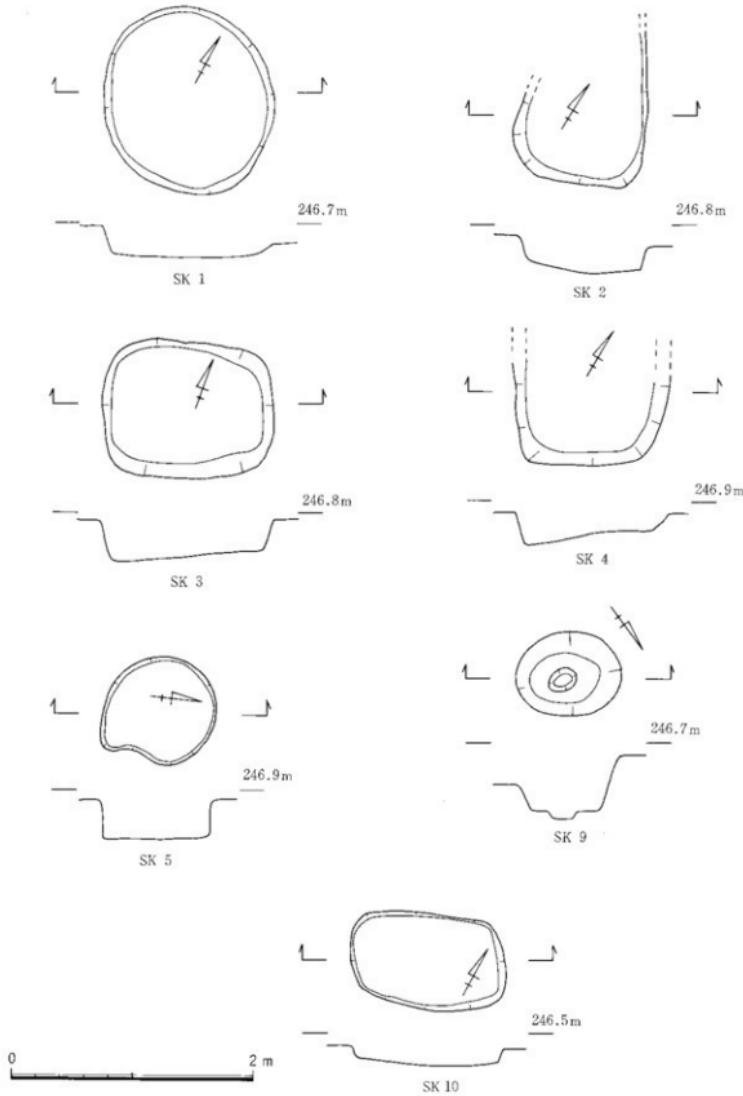


Fig. 10 SK 1 ~ 5, 9, 10 実測図

SK 4 (Fig. 10)

SK 4は、SK 3の西にある。平面形は方形を呈すと考えられるが、約半分が調査区外に出ている。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は西側が深く、東側が一段高い面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、埋土中より弥生終末か古式土師器の細片が9点出土していることから古墳時代の遺構と考えられるが図示できるものはない。

SK 5 (Fig. 10)

SK 5は、SK 4の西隣にある。平面形は不整円形を呈し、長軸102cm、短軸90cm、深さ33cmを測る。壁は垂直に立ちあがり、床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土の単純一層で、埋土中より弥生土器の細片が数点出土しているが図示できるものはない。弥生時代後期に属する。

SK 9 (Fig. 10)

SK 9は、調査区中央の西にあり、ST 2を切っている。平面形は楕円形を呈し、長軸86cm、短軸70cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は中央部が凹む。埋土中より古式土師器の細片が1点出土している。

SK 10 (Fig. 10)

SK 10は、調査区の東南にある。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸126cm、短軸78cm、深さ9~16cmを測る。断面は舟底状を呈し、床面は凹状を呈す。埋土は濃茶色粘質土で、埋土中より弥生終末及び古式土師器の細片30点が出土しているが図示できるものはない。古墳時代に属する。

SK 11 (Fig. 11・12・13)

SK 11は、調査区の西部にあり、長軸1.6m、短軸0.64mを測る長楕円形のプランを呈し、南端が新しい時期のピットによって切られている。深さは45cm前後を測り床面はほぼ水平である。壁面は何れも斜め方向に直線的に立ち上がる。埋土は、I層：暗茶色粘質土、II層：濃茶色粘質土からな

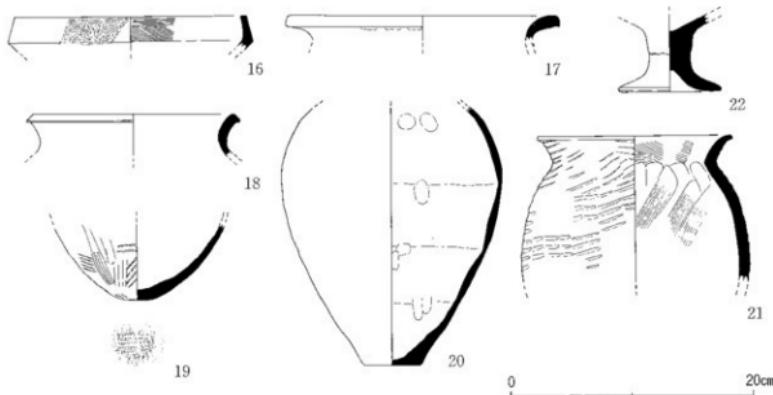


Fig. 11 SK 2 (16), SK 3 (21), SK 11 (17・18・20・22), SK 13 (19) 出土遺物実測図



Fig. 12 SK 11実測図及びセクション図

り、I・II層共に炭化物を含み、II層には焼土塊がブロック状に見られる。遺物はII層から壺口縁部2点(17・18)、同胴部(20)、高坏脚部(22)、及び結晶片岩を加工した打製石包丁が2点(23・24)出土している。床面出土の遺物は認められないが、一括性の高い資料として把握することができよう。20は内面をヘラ削り(下→上)し

た後ナデ調整を施しております。薄手の造りである。外面は全面焼けしており胴下半は被熱赤変している。22は本県の中期末葉に希に見られる中実の柱状部をもった高坏である。中期III-1期に比定するとのできる資料である。

SK 11の性格は、形態・掘り方から見て墓である可能性がある。

#### SK 13 (Fig. 11・14)

SK 13は、調査区の西北にある。平面形は楕円形を呈し、長軸108cm、短軸92cm、深さ22cmを測る。壁は斜めに立ちあがり、床面は平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土で、図示した壺底部(19)の他、弥生終末～古式土師の細片が多く出土している。これらの多くは、被熱赤変しているものが多い。

#### SK 14 (Fig. 14)

SK 14は、調査区中央の西にある。平面形は隅丸長方形を呈し、長軸130cm、短軸100cm、深さ8.5～15cmを測る。壁は西側急傾斜、東側緩やかに立ちあがり、床面はほぼ平坦な面をなす。埋土は濃茶色粘質土で、弥生終末～古式土師の細片16点が出土しているが、図示できるものはない。

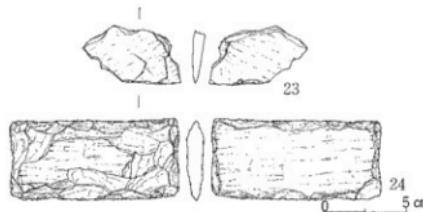


Fig. 13 SK 11出土遺物実測図

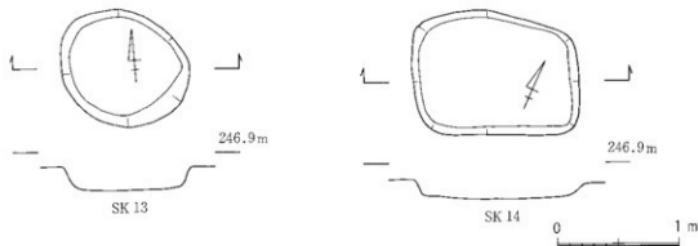


Fig. 14 SK 13, 14実測図

#### SK 32 (Fig. 15・16・17・18・19)

ST 2の床面で検出した土坑であり、ST 2に切られている。長軸1.17m、短軸1.07mの橢円形のプランを呈する。南壁側で小ピットと切り合っているが、先後関係は不明である。深さは1.25mを測り、断面形は逆台形状をなす。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より多量の弥生後期土器と結晶片岩の自然礫が出土している。遺物の圧倒的多数は上層から折り重なるように出土しており、中層からは完形の甕(21)が1点出土しているにすぎない。中層より下からは遺物・礫共に全く出土していない。これら一群の土器は出土状況から見て、SK 32が半ば埋まった段階で一時期に投げ込まれたものであり、極めて一括性の高い資料である。土器の組成は、壺(25~32・57)、甕(33~51・53~56・60)、鉢(52・58・59・63)、高坏(61・62・64~68)である。口縁部から土器の組成比率を出すと壺：甕：鉢：高坏=6:18:3:4となり、甕が最も多く全体の58.0%を占めている。また図示した甕のうち12点(33・35・37・38・40・43・44・47・49・50・54・56)が煤けている。壺も2点(27・31)が煤けている。また壺(29)の外面には黒色顔料を塗付している。

壺・甕共に1点づつ四線文が見られる他はすべて粗縁であり、文様も列点文を施す壺が2点(28・30)ある以外は無文である。四線文を有する2者(26・33)は、胎土中に当地域特有の結晶片岩を含んでいることから、在地産であることには違いないが、発色や砂粒の構成が他の多くの土器と異なっている。このうち甕(33)は古い時期のものが混り込んだものと考えなければならない。器面調整は、甕(50)の内面がヘラ削り+指頭によるナデが施されているが、他の多くは壺・甕共に外縁ハケ、内面指頭によるナデ調整を基調としている。SK 32出土のこれらの土器は、地域性も考えなければならないが後期中葉の時期に比定することができる。なおこの一群の土器の位置付けについては後述する。

#### SK 33 (Fig. 20)

SK 33は、ST 2の南端にある。平面形は橢円形を呈し、長軸82cm、短軸72cmを測る。床面は南端が最も深く、北に向かって立ちあがり、床面近くに20cm前後の扁平な石を5個配している。検出面直下より甕の胴部(69)のはか、弥生終末～古式土師器の甕片10数点が出土している。埋土は濃茶色粘質土単純一層で、埋土中より弥生終末～古式土師器の甕15点、高坏のものとみられる器台片5

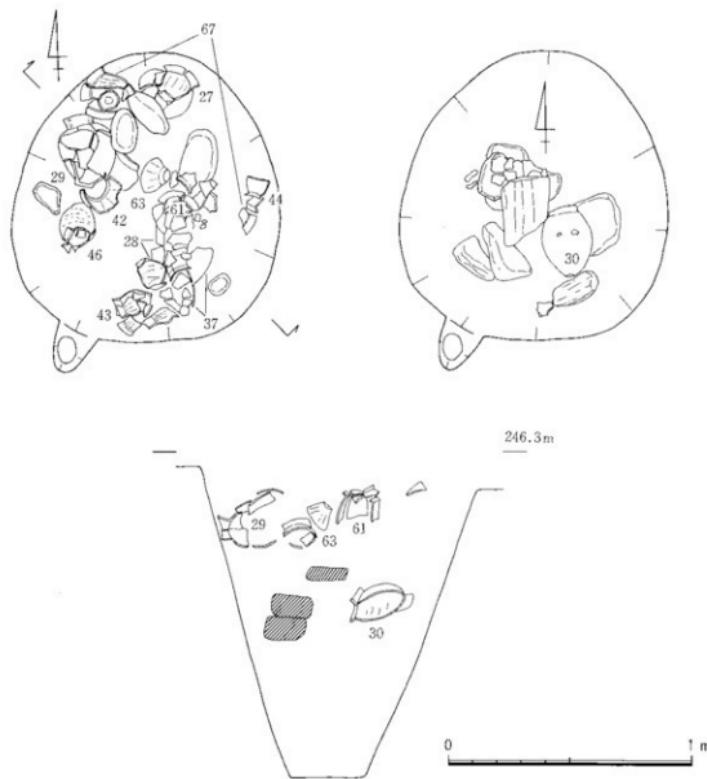


Fig. 15 SK 32遺物出土状況実測図（数字は図版No.）

点が出土している。古墳時代初頭に属する。

### (3) 集中出土地点の土器 (Fig. 21-70-73)

調査区西寄りのF 1・2地点のVI層下位、弥生・古墳時代の遺構検出面上より、壺の3~4個体分の破片が長軸3m、短軸1mほどの範囲から集中して出土した。これらの土器片群は何ら遺構に伴うものではないが、出土状況から見て原位置をほとんど動いておらず、この場所で棄損したものと考えられる。2個体分(70・71)は完形に復元することが出来た。出土土器は、すべて古式土器1期に属する。このような例は、近接する堀ノ尻遺跡でも認められた。これらの土器は、堀ノ尻遺跡例も含めて激しく焼けており、かつ被熱赤変している。煮沸に供された後、再び使用されるこ

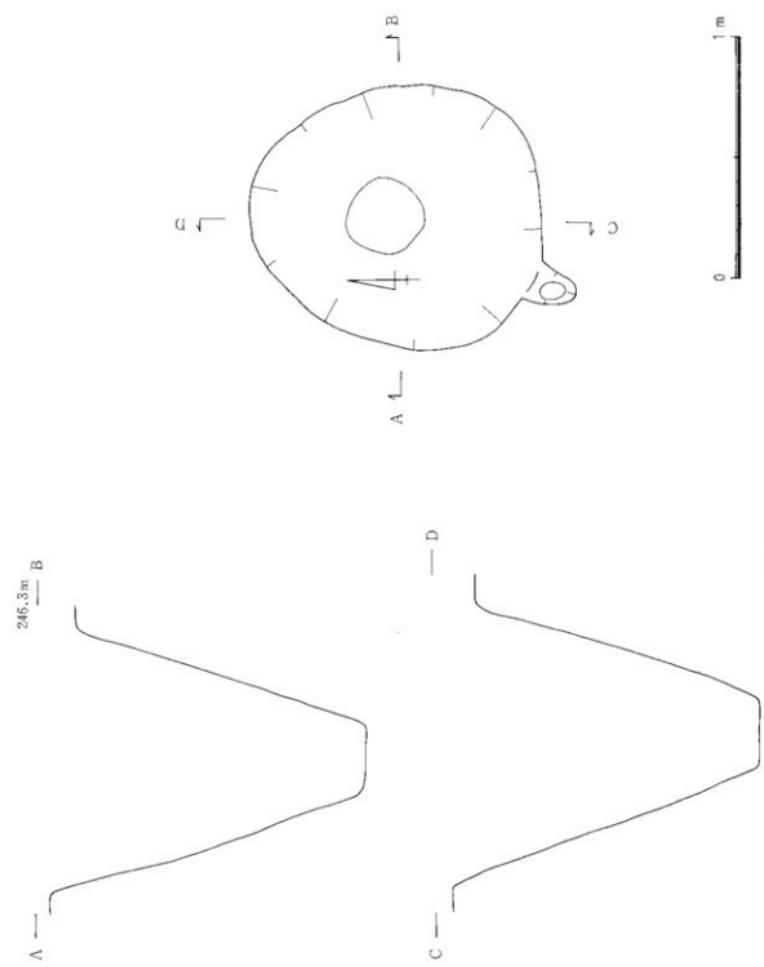


Fig. 16 SK 32平面圖及U斷面圖

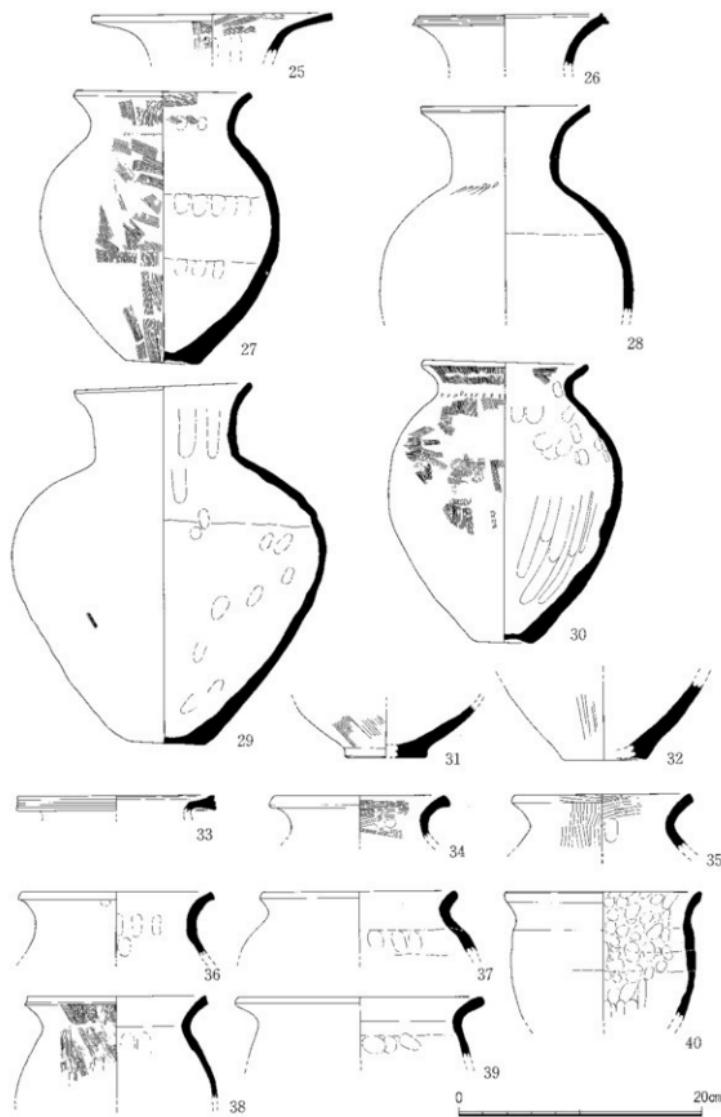


Fig. 17 SK 32出土遺物実測図（臺：25～32、甕：33～40）

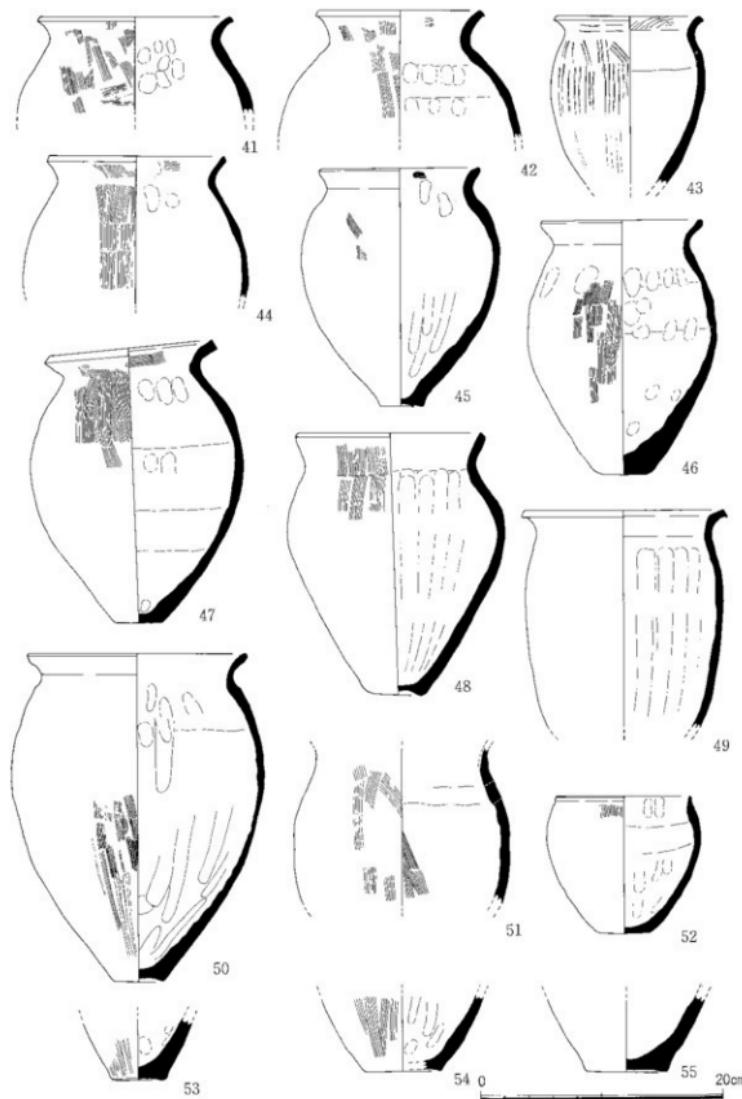


Fig. 18 SK 32出土遺物実測図 (甕: 41~51, 53~55)

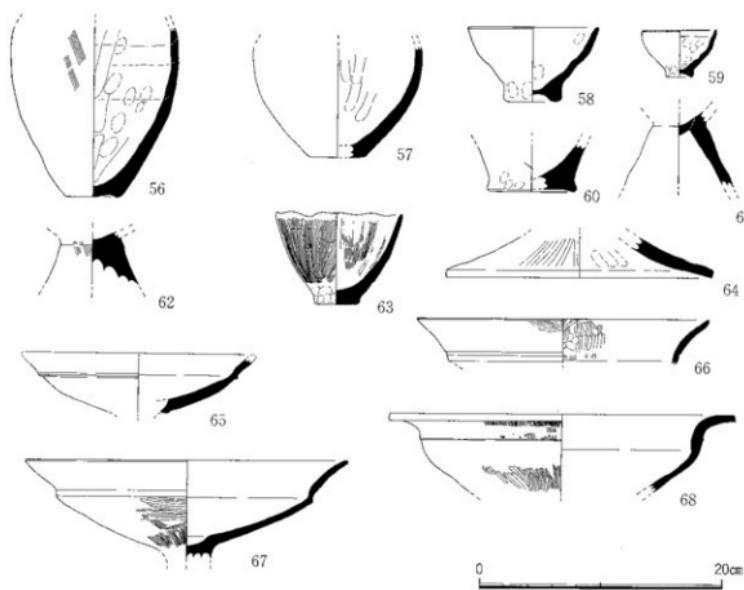


Fig. 19 SK 32出土遺物実測図 (甕: 56・60, 壺: 57, 鉢: 58・59・63, 高環: 61・62・64~68)

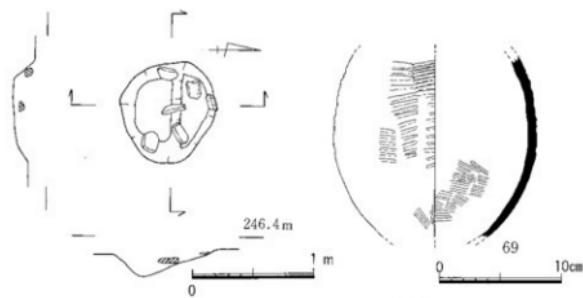


Fig. 20 SK 33及び出土遺物実測図

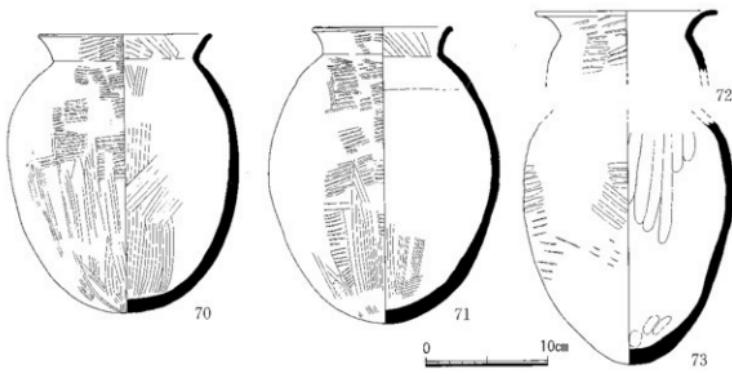


Fig. 21 集中地点出土遺物実測図

となく「放置」されたものと考えられる。この背景には煮沸を伴う祭祀のあった可能性がある。堀ノ戻例も壺3個体程度であり、この数は1つの単位を示すものであろう。

### 3. 中世以降の遺構と遺物

#### (1) 土坑

##### SK 8 (Fig. 23)

SK 8は、調査区北中央寄りにある。平面形は不整円形を呈し、長軸100cm、短軸82cm、深さ17~19cmを測る。埋土は灰茶色粘質土で、埋土中より土師器塊底部が1点出土しているが図示できない。

##### SK 12 (Fig. 23)

SK 12は、調査区中央の西にある。平面形はほぼ円形を呈し、長軸96cm、短軸90cm、深さ16~21cmを測る。壁は急傾斜で立ちあがり、床面は平坦な面をなす。東南側でピットと切りあっているが、先後関係は不明である。埋土は明褐色のブロックの混じる黒褐色で、埋土中より中世の土師器細片数点、唐津溝縁皿片(76)1点、弥生終末~古式土師器細片が6点出土している。近世の土坑に属する。

##### SK 17 (Fig. 23)

SK 17は、ST 1の北側に隣接し、一部ST 1を切る。平面形は椭円形を呈し、長軸184cm、短軸110cm、深さ8~36cmを測る。西侧部分で一旦テラス状に緩やかに傾斜する段を形成した後、床面を形成する。埋土は濃茶色粘質土で、須恵器、土師器、弥生~古式土師器片が数点出土しているが、図示できるものはない。

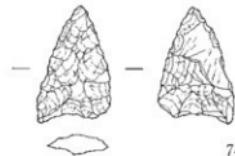


Fig. 22 SK 20出土の石鏡実測図  
(実大)

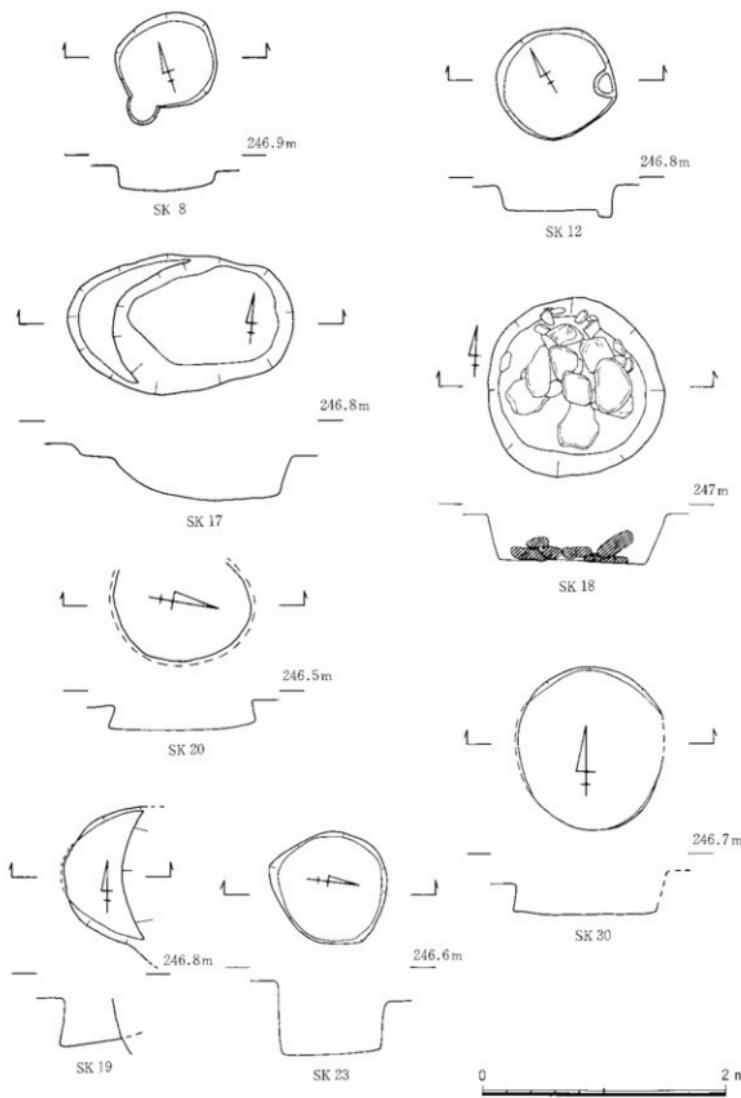


Fig. 23 SK 8, 12, 17~20, 23, 30実測図

### SK 18 (Fig. 23)

SK 18は、SK 17の東側にあり、ST 2・SK 19・SK 20を切っている。平面形は円形を呈し、長軸148cm、短軸142cm、深さ36~42cmを測る。断面は逆台形を呈し、床面は東にやや低く傾斜している。埋土は灰茶色粘質土で、古式土師器1点、弥生終末~古式土師器10数点、鉄片1点が出土しているが、図示できるものはない。SK 18の床面には、人頭大から拳大の扁平な結晶片岩が数多く積まれている。詳細な時期比定や性格は決め難いが、意図的に積み上げられたものであることには違いない。

### SK 19 (Fig. 23)

SK 19は、SK 18に切られているが、平面形は梢円形を呈すと考えられる。壁は西側一部分がオーバーハングしており、床面は西から東向きに緩やかに傾斜している。埋土は灰茶色粘質土で、弥生終末及び古式土師器片10点、土師器塊などの細片13点が出土しているが、図示できるものはない。

### SK 20 (Fig. 22・23)

SK 20は、ST 2のベッドを切っており、SK 18に切られているが、平面形は梢円形を呈すと考えられ、長軸130cm、短軸94cm、深さ16~20cmを測る。壁は全面にオーバーハングしており、床面はほぼ平坦である。埋土は明褐色のブロックが混じる黒褐色で、弥生終末~古式土師器の細片25点、瓦器1点、石鎚(74)1点、中世の土師器10点が出土している。

### SK 23 (Fig. 23・24)

SK 23は、調査区の南西にある土坑群の中にあり、ST 2・SK 22・SK 34と切りあっている。平面形は円形を呈し、長軸98cm、短軸92cm、深さ60cmを測る。

壁は垂直に立ちあがり、床面は平坦である。埋土は灰茶色粘質土で、床面より瀬戸の片口おろし皿大片(75)1点、中世の土師器細片2点、弥生終末~古式土師器細片3点が出土している。

### SK 30 (Fig. 23)

SK 30は、調査区のほぼ中央部にあり、SK 29と切りあっている。平面形は梢円形を呈し、長軸134cm、短軸120cm、深さ42cmを測る。壁は一部オーバーハングしており、床面はほぼ平坦である。埋土は明褐色のブロックが混じる黒褐色で、弥生終末~古式土師器片36点、瓦器1点、中世の土師器20点が出土している。

#### (2) ピット出土の遺物 (Fig. 25)

100個余のピットを検出したが、性格不明のものが多い。主なものについては表-3に示した通りである。柱穴と考えられるものもあるが、掘立柱建物址や柵列等を復元することはできない。77(P5)の白磁碗は、森田編年IV期に属する。78(P25)は外底に「宣徳年製」銘(2)

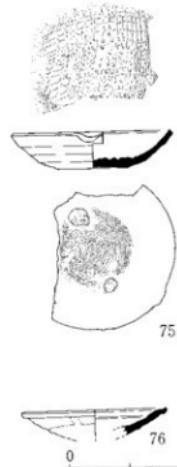


Fig. 24 SK 23 (75), SK 12 (76)  
出土遺物実測図

がある。伊万里染付小壺で、17世紀後半頃の所産であろう。79（P24）は伊万里染付碗である。80（P11）は瀬戸天目、81（P21）は口径46cmを測る土鍋で外面は激しく焼けている。82（P31）は小柄の柄である。鉄を芯にして浮彫り装飾を施した薄い銅板をかぶせている。浮彫りは2頭の馬であり表面に塗金のあとが認められる。

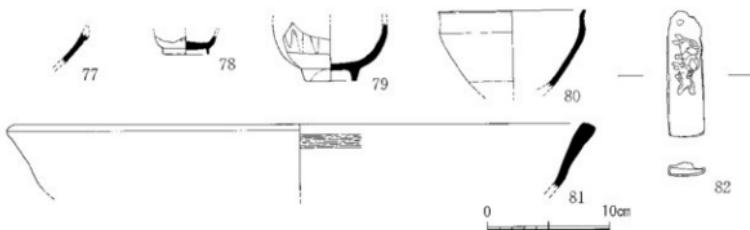


Fig. 25 ピット出土の遺物 (77:P 5, 78:P 25, 79:P 24, 80:P 11, 81:P 21) (82は½)

### (3) 包含層出土の遺物

各層ともに各時代の遺物が含まれているが、包含層遺物として説明する。

#### ① 土器 (Fig. 26)

IV層からは93・94など古式土師器の大型破片や完形に近いものが多く出土しているが、輪高台を有する土師器塊も出土している。注目すべき遺物としては、縄文晩期深鉢がある。83は口縁下7~8cmの位置に断面三角形の刻目突帯を貼付している。その他の層準からは、弥生中期の壺・同甕、後期の甕(86)・壺(87)・鉢(85)などと共に土師器塊(95)・壺(97)・鍋(91)、青磁碗(90)、須恵器の小型無頸壺などが出土している。

#### ② 石器 (Fig. 27)

5点の打製石包丁と打欠き石錐が出土している。石材はすべて吉野川流域に特徴的な結晶片岩を用いている。略方形を呈し両長側縁に刃部が造り出されている。102と103は両短側縁に抉りが認められる。104の石錐は、扁平な河原石の両長側の中央部を打ち欠いている。

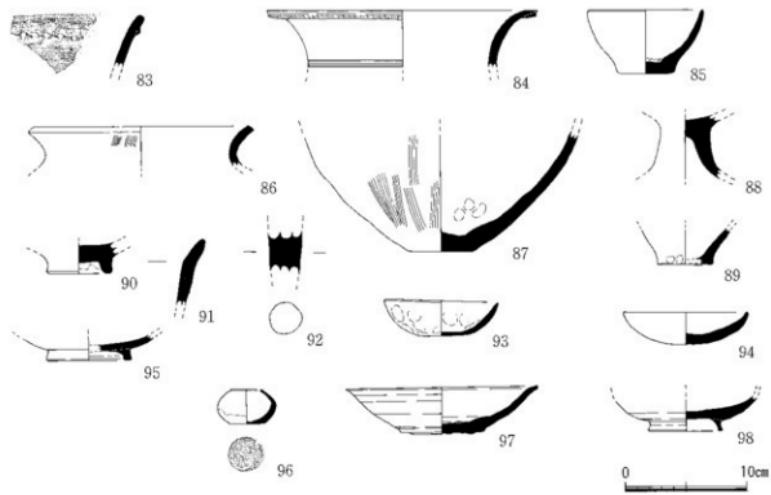


Fig. 26 包含層出土遺物実測図

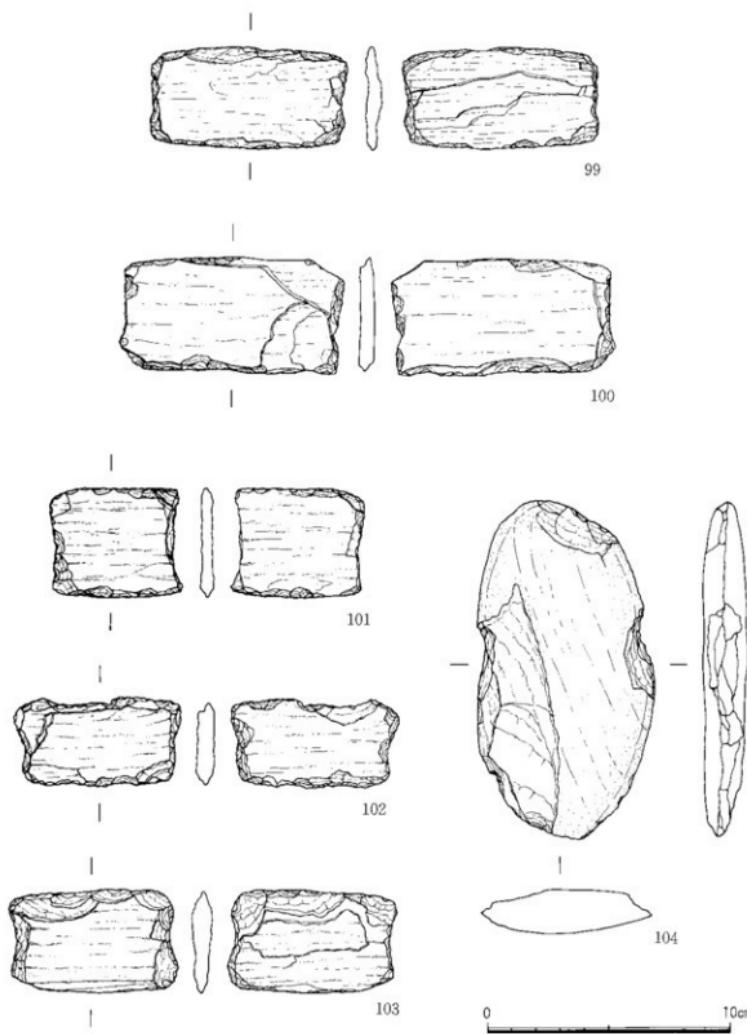


Fig. 27 包含層出土遺物実測図（石包丁：99～103、石錐：104）

表3 ピットの法量・形態及び出土遺物一覧表

P No.	計測値(cm)	深さ(cm)	平面形態	出 土 遺 物
1	60×?	25	不整形	鉄片1点
2	24×26	21	円 形	
3	38×44	8	タ	
4	直径34	38	タ	弥生土器2点、土師器1点 近世陶磁器1点、鉄片2点
5	直径44(柱痕跡有 径16)	10(柱痕跡16)	タ	白磁碗1点(図版No.77)、鉄片1点
6	64×40	13	楕円形	弥生後期土器1点
7	34×30	48	タ	
8	直径34	35	円 形	土師器1点、須恵器1点
9	34×26	37	楕円形	弥生土器1点
10	44×40	50	円 形	土師器2点
11	直径68	61	タ	瀬戸天目1点(図版No.80)、弥生土器1点
12	70×50	32	楕円形	土師器2点、唐津溝縁皿1点 鉄塊1点
13	直径66	36	円 形	青磁1点
14	直径74	21	タ	上師器4点、鉄塊2点
15	直径28	29	タ	弥生土器1点、土師器2点
16	直径38	47	タ	土師器4点
17	64×58	23	タ	弥生土器1点、土師器3点 須恵器1点
18	直径44	21	タ	弥生土器5点、土師器1点
19	直径40	46	タ	弥生土器5点
20	40×30	59	楕円形	弥生土器3点、疊1点
21	28×24	47	円 形	土師器鍋1点(図版No.81)
22	直径30	44	タ	弥生土器3点
23	22×16	28	楕円形	土師器1点
24	42×36	40	円 形	土師器1点、近世磁器碗1点(図版No.79)
25	直径32	51	タ	近世磁器碗1点(図版No.78)
26	直径50	18	タ	弥生土器10点
27	直径22	24	タ	弥生上器3点
28	直径30	28	タ	土師器4点
29	70×58	15	楕円形	弥生土器6点
30	直径28	32	円 形	弥生上器2点
31	直径26	22	タ	小柄の柄部1点(図版No.82)
32	直径26	15	タ	

## 第IV章 考 察

### 1. SK 32出土の土器 (Fig. 17~19)

SK 32埋土上層を中心に弥生後期土器がまとまって出土している。すでに述べたように、床面出土の土器は見られないが、SK 32が半ば埋まつた段階で一気に投げ込まれた状況を示しており一括性の高い資料として把握することが可能である。嶺北地域における土器編年の充実、更に高知平野との比較を行う上において重要な資料となるものである。ここでは、当土器群に見られる諸特徴を抽出し、編年的位置付けと地域的特徴を明らかにするものである。

口縁部の点数をもとに土器組成を見ると、壺：甕：鉢：高杯が6：18：3：4となっている。ただ甕の口縁部細片(33)は中期の土器であり、この1点のみは混入遺物としなければならない。壺は、すべて広口壺であるが口頭部の形態から次の3つのタイプに分けることができる。A類：口縁部がラッパ状に強く外反する(25)。B類：直立気味に立ち上がる頭部から、緩やかに外反する口縁部を有する(26, 28, 29)。26は口唇に凹線文を有し、28は頭部下端に列点文を施している。C類：口頭部が丸味を帯びて短く外反する(27, 29)。A類は後期後半以降～古墳時代初頭に盛行するタイプで、B類は後期初頭から顕在化するタイプである。C類は中期以来の伝統的なタイプであるが後期末になると見られなくなる。これらの壺は、外面ハケ、内面ナデ調整を基調とし、さらに内面には指頭による圧痕が見られ内面器表面の凹凸が顕著に認められる。27～29の内面には、4～5cm幅の粘土帶の接合部が認められる。また27, 30の底部は上げ底風に成形されており底部形態の特徴として把握することができる。

甕は、混入の33を除けば全て無文、器面調整は壺と同様で外面ハケ、内面指頭によるナデ調整を基調とし、指頭圧痕も顕著で内面の凹凸も激しい。ただ50のみ内面ナデ調整の下地にヘラ削りがあり、外面下半にヘラミガキが認められる。最大径は40と49が口縁部にあるが、他の諸例はすべて上胴部にある。口縁部は総じて丸味をおびてく字状に外反する。底部の形状も上げ底状を呈するものが目立ち壺と共通している。成形・調整手法も粗雑である。また18点中12点までが焼けており、中には被熱赤変して激しく焼けているものもある。

鉢は3例ともに小型で、上げ底状の底部が見られ指頭圧痕も顕著に認められる。この種の鉢は、後期末～古墳時代初頭に盛行するタイプで、その先駆と考えられる。高杯は全て口縁部が外反するタイプで、65は杯底部の刻離痕から見て脚部との分割成形手法による可能性が高い。

南四国における弥生後期土器の編年は、最も資料が豊富な高知平野中央部において7小期に組まれているが、それ以外の地域においては資料不足のために十分な地域編年がなされていないのが現状である。<sup>(3)</sup> 従って高知平野の編年のどの段階にあてはまるのかと言う作業を通して地域編年を組みざるをえない。SK 32出土の土器群は、底部成形に現れた特徴や小型鉢の出現などから後期4期に比定することが可能と考えられる。この特徴的な上げ底状の底部は、ドーナツ状の粘土紐または高台の上に底部を作り、周縁部が高まりをもつて上げ底状となる成形手法であり、山陽の土器編年で高橋護氏がⅦ期とⅧ期とを画する相違点として指摘した成形手法に対応するものと考えられる。従って高橋編年のⅧ期の中に納まる土器群として大きく把握することは可能であろう。その中でSK

32出土の土器群中には凹線文がほとんど認められること、また高坏の分割成形が認められることなどからⅢ-1期に併行関係をもとめたい。

上げ底状の成形法は、当該期の環瀬戸内に広く認められる特徴であり、松山平野では松山大学構内遺跡SB-7や祝谷アイリ遺跡SK 15、讃岐では下川津遺跡弥生土器溜り5などにみとめられる。<sup>(5)</sup> 売から四線文が消失し、前述の小型鉢の出現期としての共通性も有している。高知平野の資料中には当該期の好例は必ずしも多くないが、深淵遺跡のST 3を挙げることができる。ただST 3からは叩き痕跡を残す甕が少なからず出土している点が異なる。この相違の起因するところは、当地域の資料の増加を待って結論すべきところであるが、現段階においては太平洋側の高知平野と瀬戸内寄りの山間平野と言う地域差に求めたい。高知平野では、中期末以来土器に顕著に現れた吉備的特色が退潮はじめる後期3期の時期から叩き痕跡を残す土器が漸進的に増加はじめると、当地域においてはその現象が遅れるものと考えられる。

## 2. 永田遺跡の位置付け

今次調査では、古墳時代初頭の竪穴住居2棟(ST 1・2)、弥生時代中期末(中期Ⅲ-1期)の土壙墓1基(SK 11)、同後期の土坑2基(SK 5・32)、古墳時代初頭の土坑7基(SK-1・4・9・10・13・14)、同後期の土坑1基(SK 2)、中世の土坑5基(SK 8・19・20・23・30)、近世の土坑1基(SK 12)、その他時期不明土坑16基、ピット多数を検出した。遺構の性格については不明なものが多いが、弥生後期から古墳時代初頭と中世に盛行期を有する遺跡として位置付けることができる。これは北接する嶺北高校校庭遺跡の消長に一致し、同一の集落址として把握しなければならない。永田遺跡の立地する吉野川右岸の低位段丘上には、天神前遺跡、銀杏の木遺跡など<sup>(6)</sup> 弥生後期終末から古墳時代を中心とする集落址の存在が確認されている。対岸正面の北山瀬ノ上遺跡からは中広形銅矛Ⅱ式が1本出土しているが、一連の集落址の展開とは無関係ではなかろう。更に対岸西方の松ノ木遺跡からも弥生時代終末から古墳時代初頭に属する竪穴住居が15棟確認されている。吉野川を挟んだ両岸の低位段丘上には、当該期の集落の爆発的な増加が認められるが、永田<sup>(9)</sup> 遺跡もその展開の一翼を担った遺跡として位置付けることができる。ただし列挙した諸遺跡は弥生時代終末から始まっており、永田遺跡のように後期中葉ないしはそれ以前にまで遡る生活遺構の検出例は存在しない。今次調査では中期末の土壙墓も認められ、嶺北高校校庭遺跡からは四線文土器や中期の石斧も出ており、少なくとも中期末から継続して営まれて来た集落址である可能性が強い。<sup>(10)</sup> 永田遺跡は、吉野川右岸における拠点的性格を帯びた遺跡として位置付けることができよう。しかしながら古墳時代前期初頭を過ぎると、当遺跡をはじめ周辺から一斉に遺跡が消滅すると言う劇的な変化が生じる。高知平野の動向と呼応した動きとして注目しなければならない。以後この地域からまとまつた遺物が出土するのは8世紀末から9世紀を待たなければならない。この時期の遺跡は、堀ノ尻遺跡に見られるように中位段丘上に移動しているようである。これは吉野川左岸においても認められる現象である。そして中世に至って集落が拡大するに及んで再び低位段丘上に集落が営まれるようになる。

註

- (1) 出原恵三『堀ノ尻遺跡』高知県本山町教育委員会 1993年
- (2) 森田晩・横田賢次郎「太宰府出土の輸入中国陶磁器について」『九州歴史資料館研究論集』4 九州歴史資料館 1978年
- (3) 出原恵三『土佐の弥生後期土器編年』『土器からみた瀬戸内の弥生文化 瀬戸内の弥生後期土器の編年と地域性』古代学協会四国支部第四回大会資料 1990年
- (4) 高橋義「山陽」「弥生土器1」ニューサイエンス社 1983年
- (5) 梅木謙一他「松山大学構内遺跡－第2次調査－」松山大学 松山市教育委員会、松山市埋蔵文化財センター 1991年
- (6) 梅木謙一他「祝谷アイリ遺跡」(財)松山市生涯学習振興財團 埋蔵文化財センター 1992年
- (7) 大久保徹也「下川津遺跡における弥生時代後期から古墳時代前半の土器について」『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書 下川津遺跡－第2分冊－』香川県教育委員会(財)香川県埋蔵文化財調査センター 本州四国連絡橋公園 1990年
- (8) 岡本健児『銀杏の木遺跡の発掘』高知県本山町教育委員会 1984年
- (9) 出原恵三『松ノ木遺跡Ⅱ』高知県本山町教育委員会 1991年  
前田光雄『松ノ木遺跡Ⅲ』高知県本山町教育委員会 1993年
- (10) 岡本健児『嶺北高校校庭出土の遺物群』「長徳寺址発掘調査報告書」高知県本山町教育委員会 1977年

遺物観察表（土器）

博回番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口沿 器高 刷縁 底径	特 徴	備 考
Fig. 7-1	ST1	鉢	7.4 6.0 8.3 —	チャートの小縫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。 内外両面に指滅痕が見られる。口縁は短くつまみ出す。 底広であろう。		
Fig. 8-4	ST2	*	— — —	結晶片岩、チャートの小縫、粗粒砂を多く含む。淡灰茶色。 外縁ハケ。丸底。		
Fig. 8-5	*	*	10.0 3.5 —	チャートの網・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 内・外縁指滅痕著。		
Fig. 8-6	*	*	10.7 5.0 2.5	結晶片岩の小縫を多く含む。内外両面に器衣の荒れが激しい。 にぶい黄褐色。丸底風の平底。		
Fig. 8-7	*	甕	— — —	チャート、結晶片岩、長石の小縫、粗粒砂を多く含む。淡茶色。 底ハケ調整がわざかに見られる。外縁に指滅痕を残す。		
Fig. 8-8	ST2, P6	長頸甕	— — 18.0	長石の粗粒砂、小縫、石灰、角閃石の粗・細粒砂を含む。赤茶色。 胎土中に赤色顔料を混入したものとみられる。		
Fig. 8-9	ST2	甕	— — —	精選された胎土で、砂粒をほとんど含まない。にぶい黄褐色。 内面・外縁共に、ハケ状突起による横ナゲを施している。口縁部の上部に 右上がりのハケ調整跡がみられる。		
Fig. 8-10	*	甕	11.4 — —	チャートの小縫を多く含む。黄色。 叩き成形。口縁部叩き出しで、口唇は丸くおきめる。	外向・部煤 ける。	
Fig. 8-11	*	*	16.8 — —	結晶片岩、チャートの小縫、粗粒砂を多く含む。桃茶色。 口縁内面は右上がりのハケがわざかに認められる。		
Fig. 8-12	*	*	17.6 — —	河内産陶、角閃石、雲母などの細粒砂を多く含む。暗茶色。 内面は右から左方向のくっ割り後ナゲ調整と、右下がりの叩きの跡に右下がり のハケ調整が加えられている。	口縁外周 は特に激しく 燃ける。	
Fig. 8-13	*	*	15.0 — —	結晶片岩、チャートの小縫、粗粒砂を多く含む。茶色。 胴部外周に水平方向の叩きと、口縁外周、上開部の一部に横ハケ、内面に 横頭によるナゲが頭著にみられる。	全体的に煤 ける。	
Fig. 8-14	*	*	16.0 (17.3) — —	チャートの小縫を多く含む。茶色。 叩き成形にハケ調整が加えられている。	ほぼ全面が 煤ける。	
Fig. 8-15	*	*	— — —	チャートの小縫・粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。 横方向・右上がりの叩きが全体的に施された後、上部にハケ調整が施され ている。内面接続部に指滅痕がみられる。	上部全体煤 ける。	
Fig. 11-16	SK2	甕	18.0 (2.9) — —	チャートの粗粒砂を少許含む。黄茶色。 内傾して立ち上がる口縁外周に半蔵竹管状の工具による波状文と波頭間に 竹管状突起による鉤突文が施され、口縁部内・外縁に右下がりのハケ調整 が施されている。		
Fig. 11-17	SK11	甕	22.2 (2.0) — —	チャート、長石の小縫少量。粗・粗粒砂多量。外縁ににぶい褐色、内面灰色。 口唇は幅広く面取り、口縁外周は横ナゲが施されている。		
Fig. 11-18	*	*	— — —	長石、片岩、チャートの小縫、粗・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁下端は、つまみ出し、横ナゲ。		
Fig. 11-19	SK13	*	— (6.3) — 2.4	チャート、他の粗粒砂を含む。底広まで叩き成形が施されており、わざか に平底が残る。底部付近の凹は不定方向で、その上を横ハケの調整が施 されている。内面は横ナゲ調整。	外周煤ける。	

遺物観察表（土器）

辨認番号	出土地点	器種	法量 (cm)	口縁 底縁 底径	特徴	備考
Fig. 11-20	SK11	甕	— — — 4.5	チャート、長石の粗粒砂を多く含む。褐色。 器壁が薄く、内面に接合痕跡がみられ、内面ヘラ削りの上をナデ消している。 外縁ハケ調整は塵耗が激しい。	外縁全面焼ける。	
Fig. 11-21	SK3	*	16.0 (12.1) — —	チャートの小礫を多く含む。灰褐色。 上縁内部に強い指痕によるナデとハケ調整がみられる。	ほぼ全面的に焼ける。	
Fig. 11-22	SK11	高杯	— (6.4) — 8.4	チャート、結晶片岩の粗粒砂を多く含む。にい褐色。 縁は強く外反し、端部は丸くおさめる。外周に接合痕跡がみとめられる。 光沢の開拓である。		
Fig. 17-25	SK32	甕	19.2 — — —	長石、チャート、結晶片岩、粗・細粒砂を多く含む。茶色。 外縁版、内側横方向のハケ調整がみられる。	内・外縁、部分的に焼ける。	
Fig. 17-26	*	*	16.0 (4.4) — —	チャート、雲母、角閃石、結晶片岩を含む。褐色。 口縁はラバ状に外反しており、上部にわずかに拡張した口唇部2条の凹線がみられる。		
Fig. 17-27	*	*	14.2 22.4 19.6 6.0	石英、チャート、長石の粗・細粒砂を含む。褐茶色。 縁上半に横方向及び右下弓のハケ調整、削下半に縱方向のハケ調整がみられる。 内縁に接合痕跡を認める。	縁部下面下半全面焼ける。	
Fig. 17-28	*	*	14.0 (17.1) 21.1 —	チャートの小礫多数、長石、粗粒砂を含む。淡褐色。 外面縁部には削突文、内部内面にわずかに横ハケがみられるが、内外縁ともに摩耗が激しい。		
Fig. 17-29	*	*	14.4 30.2 25.5 6.2	チャート、石英の粗・細粒砂を多く含む。淡茶色。 上部に最大径を有す。直り気味の頭部から口縁部が外反し、口縁は丸い。黒色顔料後内面には指頭圧痕や指頭によるナデが顕著に見られるが、外縁の調整は不明。付。	頭部外側に頭部下面下半全面焼ける。	
Fig. 17-30	*	*	13.4 23.3 19.0 4.8	チャートの小礫、粗・細粒砂を多く含む。淡茶色。 頭部下部に剥離文列、口縁内面に横、口縁外部に縱方向のハケ調整が施され、崩壊外部最大径付近に横方向、他は縦方向のハケ調整が認められる。内側下半には指頭圧痕が顕著。		
Fig. 17-31	*	*	— — — —	チャートの小礫、粗・細粒砂を多く含む。桃褐色。 円盤状の底部。	外縁焼ける。	
Fig. 17-32	*	*	— — — 3.6	チャート、長石の小礫、粗粒砂を多く含む。黄褐色。 底部はわずかに上げ底式。		
Fig. 17-33	*	甕	16.2 — — —	チャートの小礫、粗粒砂を多く含む。茶色。 口縁部は上・下に少し試表し、2条の凹線を基らせる。内・外縁横ナデ。	内・外縁焼ける。	
Fig. 17-34	*	*	14.0 (3.6) —	チャート、長石の粗・細粒砂を多く含む。橙色。 口縁は丸味を帯びて外反。口唇はやや肥厚し、幅広い面をなす。内面横位のハケ。		
Fig. 17-35	*	*	14.4 (4.7) — —	石英、長石の粗・細粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁は幅広い面。外縁縦方向。口縁部内側横方向のハケ。木理の粗い原体。口唇にも横ハケ。	外縁焼ける。	
Fig. 17-36	*	*	15.6 (5.3) — —	チャート、長石の粗・細粒砂を多く含む。桃色。	*	
Fig. 17-37	*	*	— — —	チャートの小礫、粗・細粒砂を多く含む。淡褐色。 断面及び内面に粘土接合部を認める。縄は約3cm。 内面に指頭圧痕がある。	*	
Fig. 17-38	*	*	14.8 — 16.5 —	チャート、長石、結晶片岩の小礫、粗・細粒砂を含む。灰茶色。	*	

遺物観察表（土器）

揮回番号	出土地点	器種	法量 (cm)	上縁 器高 網縫 底縫	考 察	備 考
Fig. 17-39	SK32	甕	20.0 (16.6) — —	長石、チャートの細・粗粒砂を多く含む。明赤褐色。 内外面の調整不明。		
Fig. 17-40	+	+	16.0 (16.6) 15.2 — —	チャートの小塊、粗粒砂を多く含む。褐色。 内面に指頭圧痕を多く残す。断面に1.5cm前後の単位で接合痕。外側被熱 亦変し、剥離。	外面剥ける。	
Fig. 18-41	+	+	15.6 (8.1) — —	石灰、長石の粗・細粒砂を多く含む。茶黄色。 外側頭部及び肩部上半は右下がりを基調とするハケ。胴中位は横方向のハ ケが入る。内面指頭圧痕顕著。		
Fig. 18-42	+	+	13.5 — —	チャート、長石の粗・粗粒砂を含む。淡茶色。 口縁下端を下方につまみ出して横に強くナゲる。内面に3.5cm幅の粘土帯 接合痕跡を認む。	外面剥ける。	
Fig. 18-43	+	+	11.8 (14.0) 12.7 —	長石、チャートの細・粗粒砂を含む。赤茶色。 口縁部は丸みを帯びて外反。口縁部は面をなす。口縁部内外面横方向、胴 部外表面本連の長い縱ハケ。	側部外表面激 しく剥ける。	
Fig. 18-44	タ	+	— — — —	チャートの小塊、長石の粗粒砂を含む。灰茶色。	外面全面剥 ける。	
Fig. 18-45	タ	+	13.2 19.5 — 3.5	チャート、長石の細・粗粒砂を多く含む。淡茶色。 内外器表の焼れが激しい。胴部内面下半、指頭によるナデ。		
Fig. 18-46	+	+	13.2 20.9 — 4.0	チャート、結晶片岩の網・粗粒砂を多く含む。茶色。 口唇は丸くおさめる。内・外面指頭が顕著。内面に接合痕跡が認められる。 外側腹ハケ。口縁部の一部に寄せ痕。外側ハケ調整を施すか。胴部中位以 降は残り無い。		
Fig. 18-47	+	+	13.7 22.8 17.5 4.0	チャート、長石、砂岩の小塊、粗粒砂を多く含む。灰褐色。 口縁部内面わざかに右上がりの横ハケ。胴部外表面ハケ。 内面に粘土帶接合痕跡を認む。	外面全面剥 ける。胴部 中位以下剥 離。	
Fig. 18-48	タ	+	15.5 21.5 18.5 4.5	長石、結晶片岩、チャートの小塊、粗粒砂を含む。茶色。 横めに粗粒砂をつくり。頭部、胴部外面上半に縱方向のハケ。 内面はハケ状原体のナデの上を指頭でナデる。		
Fig. 18-49	タ	+	16.4 (18.0) 16.2	長石、チャートの網・粗粒砂を含む。桃褐色。 内面指頭によるナデが認む。口唇は面をなし強い横ナデ、わずかに下方に つまみ出す。外側全面剥離。被熱変形。		
Fig. 18-50	タ	+	18.0 27.1 20.8 4.0	長石、チャートの粗粒砂を含む。褐色。 内面ヘラ削り+指頭による強いナデ。外側細い原体による縱ハケを基調と し、下位に横ハラミガキ。外側被熱赤茶。	外面全面剥 ける。	
Fig. 18-51	タ	+	13.8 (12.9) 17.8	結晶片岩、長石、石英の網・粗粒砂を含む。明赤褐色。 側部外表面及び内面の中位以下縦ハケ調整。内外器表の剥離が激しい。	外面剥ける。	
Fig. 18-52	タ	鉢	11.1 11.3 — 4.4	チャート、長石の小塊、網・粗粒砂を含む。上割部に最大径を有す。外側 口縁下に木縫の粗いハケ。内面最大径付近に横方向の強いナデ。内面下位 に指頭によるナデ。		
Fig. 18-53	タ	甕	— — — —	結晶片岩、チャートの小塊を含む。にぶい橙色。 わずかに上げ底状。外側ハケ+縦ミガキ。		
Fig. 18-54	タ	+	— — 3.3	チャートの小塊を含む。外側ハケ調整。内面指頭ナデ+ヘラナデ。外側被熱 赤色。	外面剥ける。	
Fig. 18-55	タ	+	— — 6.8	チャート、結晶片岩、長石の小塊、粗粒砂を多く含む。褐色。 底部分的にミガキか。わずかに上げ底状。外側はナデまたはヘラ ミガキ。		

遺物觀察表（土器）

採集番号	出土地点	器種	法量 （cm）	口絵 等 測定 値	特徴	備考
Fig. 19-56	SK32	甕	— 13.8 4.5	チャート、長石、結晶片岩を含む。明褐色。 内面に指頭圧痕顯著。内面、断面に粘土の接合痕を認める。 2~3cm縁の内側接合。	外側激しく 傷ける。	
Fig. 19-57	ク	甕	— — — 2.3	結晶片岩の小塊、長石の粗粒砂を含む。橙色。 内面指ナデ。外面ナデ調整。		
Fig. 19-58	シ	鉢	10.8 6.15 — 3.8	チャートの小塊、粗・細粒砂を含む。橙色。 底部付近に黒斑。外側の調整はほとんど観察不能なるもハケか。太い上げ 弦の底部。底部脇に指頭圧痕顯著。		
Fig. 19-59	シ	ミニチュ ア鉢	6.0 3.9 — 2.2	チャートの小塊、長石の細・粗粒砂を多く含む。灰色。 内面指頭圧痕顯著。高台状の底部。		
Fig. 19-60	ク	甕	— — —	チャートの小塊、粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。 上げ底状の底船。外方に張り出す。底部脇に指頭圧痕顯著。	内底剥ける。	
Fig. 19-61	シ	高杯	— — —	チャート、長石、石英の小塊、粗・粗粒砂を含む。淡茶色。 脚部はハ字状に開く。充填法により、調整観察不可。		
Fig. 19-62	シ	シ	(4.3)	石英の細・粗粒砂を含む。にぶい褐色。 脚外間に縦ハケ。		
Fig. 19-63	シ	鉢	10.35 7.6 — 3.1	石英、長石の細・粗粒砂を多く含む。橙色。 内・外蓋縫ハケ。底部脇に指頭圧痕顯著。弱い波状口縁をなす。下脚部に 黒斑あり。		
Fig. 19-64	シ	高杯	22.0	チャートの小塊、粗・粗粒砂を多く含む。桃茶色。 外側は木理の無いハケ調整。口脚はしっかりした面。		
Fig. 19-65	シ	シ	19.0	チャート、黄斑、長石の粗粒砂を多く含む。淡茶色。 口縁外端立上がり付近に突尖状の段。内・外蓋ナデ。		
Fig. 19-66	シ	シ	24.0 (5.7)	長石、チャートの小塊少量、同粗・細粒砂を多く含む。にぶい褐色。 外側脇面部下ににぶい円状ラインが走る。 内外面ヘラミガキを施すも、内面は特に丁寧。		
Fig. 19-67	シ	シ	26.4 7.5 (环部)	石英、チャートの小塊、粗・粗粒砂を多く含む。茶色。 大きさに比して刷毛がうすい。縁は明瞭な線脚をもって立ち上がり。大 きく外反、完全の可能性あり。内面の調整は不明。外側脚部付近はハケ調 整のみ。それ以外は横方向のヘラミガキ。口縁面はナデ+ミガキか。		
Fig. 19-68	シ	シ	28.4 (6.5)	チャート、結晶片岩の粗・細粒砂を多く含む。桃茶色。 脚部は丸味を帯びて立ち上がり、細い段階が生ず。环部外側巾 位以下に丁寧なヘラミガキ。口縁部外側縫ハケ。内面は荒れが激しく、観 察不可。		
Fig. 20-69	SK33	甕	(15.0) 18.8	チャート、石英、結晶片岩の小塊、粗粒砂を多く含む。褐色。 外側水平方向のヨリキ。脚部内面下位に右下がりのハケ。外側被熱赤変。		
Fig. 21-70	F1集中	シ	14.2 23.2 19.0	チャート、結晶片岩の粗・細粒砂を多く含む。堆灰-灰褐色。 駄孔・色斑共にNo. 39に酷似。叩き成形。刷毛は水平方向。口脚部は左下 がり。脚部外側巾位以下に縦ハケ。内面も基本的には縦ハケ。口縁部内面 は右下がりのハケ。		
Fig. 21-71	シ	シ	11.4 24.7	結晶片岩、石英、チャートの粗・細粒砂を含む。灰褐色。 叩き成形。外側下半縫ハケ。内面底部付近もハケ。口縁部内面右下がりの ハケ（月の牙の痕跡）。ロジン叩き出し。上脚部断面に接合痕あり。丸底。	外面全面 傷ける。	
Fig. 21-72	F2集中	シ	15.0 5.3	チャート、長石、石英の細・粗粒砂を多く含む。桃茶色。 叩き成形。口脚部叩き出し。		

遺物観察表（土器）

検査番号	出土地点	器種	法面 口径 高さ 底径 (cm)	特徴	備考
Fig. 21-73	F2集中	甕	— 20.2 17.3	チャート、長石の細・粗粒砂を多く含む。橙色。 副部下半右下トガり、中位より上は水平方向の叩き成形。内面は指頭によるナデ調整。丸底。一部焼け、被熱変色。	
Fig. 24-75	SK23	片口の胡 ろし皿 (灯明皿 に転用)	13.0 3.05 — 6.0	胎土は黄褐色でやや粗い。胎は透明度のあるうす練。貫入あり。外面のは全面に施釉。内面露胎。口縁端を内側につまみ出し、横ナデ。口唇は面をなす。外面はロクロ口顎型。底部系切り。外底に2ヶ所胎土目があり。内底は粗いタッヂで格子に目を入れる。磨口焼。	内底櫻ける。
Fig. 24-76	SK12	皿	11.8 (2.15) — —	胎土はやや粗く、胎はくすぐだ緑色（オリーブ色）。 外周下半の露胎部は茶灰色。唐津焼。	
Fig. 25-77	P5	白磁碗	— — — —	胎上は灰白色でやや粗い。胎は白濁色。 白磁。	
Fig. 25-78	P25	碗	— — — 3.8	内外画共、白濁色の釉がかかるが、暈付けのみ露胎しており、胎土目が少し露みられる。見込み部は円錐形を呈する。胎土は密・堅緻。染付の典徴はうす青で高台部の文字はにお青。中国の宣德年製をまねたもの。	
Fig. 25-79	P24	*	— — —	胎土は白色粗緻。釉は白濁色、全面露入。 断面逆三角形の内沟がやや左のびる。高台外縁にまで施釉。暈付けに胎土目付着。下脇部外面に壓紋、その上に波文状。近世の染付。	
Fig. 25-80	P11	瀬戸天目	12.0 (6.5) — —	胎土は黄褐色でやや粗い。内外面に黒褐色の釉がかかる。断面は灰白色。 外面下位の露胎部も黄褐色。横方向の削り。	
Fig. 25-81	P21	土鍋	46.0 (5.5) —	右美、長石の細・粗粒砂を多く含む。内外面茶色。 内面は丁寧な横ハケ。外圍は粗いナデ。	外面強しく 櫻ける。
Fig. 26-83	包合層 (IV層)	深鉢	— — —	長石、石英を含む。内面黒色。外面淡茶色。 口唇面取り。口縁下7~8mm位置に断面一辺角形の割目突窓貼付後、上下を強く横ナデ。内面は横方向の粗い捺痕+横ヘミガキ。発掘深時。	
Fig. 26-84	*( I・II層)	盃	22.2 (4.7) — —	チャートの小塊、細・粗粒砂を貼付。口縁下端に崩れ。胎土帯は指頭で押出。頭部に捺痕。頭部外縁に横方向のハケ。内面ナデ。ハケ+崩。	外面櫻ける。
Fig. 26-85	包合層	鉢	9.4 5.3 4.8	チャートの小塊を多く含む。にぶい黄褐色。 内外面器表の剥離が激しい。	
Fig. 26-86	*	甕	17.5 — — —	右美、チャートの砂粒を多く含む。橙色。 外周わずかにハケ調整をとどめる。口縁は丸く外反し、口唇は面をなす。	
Fig. 26-87	*	壺	— — — 5.4	チャートの小塊、粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。 外面木理の粗いハケ調査。	外周は燐け か、黒色粗 料付か。
Fig. 26-88	*( II層)	高杯	— — — —	長石、石英、チャート、結晶片岩の小塊、細・粗粒砂を多く含む。 調整不明。	
Fig. 26-89	*	鉢	— — 2.3	長石の粗・粗粒砂を多く含む。にぶい褐色。 内面はナデ調整を施しているが堅純。わずかに上げ底状の底部。	
Fig. 26-90	*	青磁碗	— (2.6) (5.0)	胎土は灰色でやや粗く、胎は綠濁色。 高台内面まで施釉。暈付けは丸くおさめる。露胎部（外底）は灰褐色。	
Fig. 26-91	*( II層)	土鍋	— — —	右美、長石の粗粒砂を多く含む。黄茶色。 口縁は内面に棱を有して外反、外側がわずかに肥厚する。	外面強しく 櫻ける。

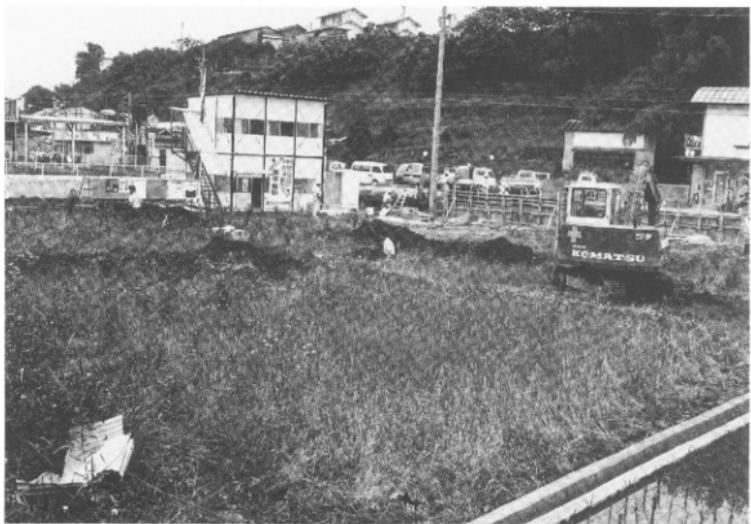
遺物観察表（土器）

拂団番号	出土地点	器種	法量 (cm) 口径 器高 側厚 底径	特 徴	備考
Fig. 26-92	包含層 (I層)	鍋の脚	— (3.7) — —	石英。長石。雲母の細・粗粒砂を多く含む。明赤褐色。 往2.7~2.4cm。	
Fig. 26-93	〃 (IV層)	鉢	9.8 3.1 — 2.7	チャート。長石。結晶片岩。石英の小粒。粗粒砂を多く含む。にぶい黄橙色。 外周ナデ。弥生終末~古墳期。	
Fig. 26-94	〃	〃	10.2 2.7 — —	石英。チャート。結晶片岩の小粒。細・粗粒砂を含む。灰白色。 光沢粘土板の剥離したもの。	
Fig. 26-95	〃 (II層)	内黒塊	— (2.0) — 7.0	精選された胎土。雲母粒子を認む。外面にぶい橙色。 しっかりした高台をやや外向さにはりつけ。端部は内側に肥厚。内面を強く擦ナデ。体部内外へラミガキ+内面炭素吸着。	
Fig. 26-96	〃	無頸壺	2.4 2.8 4.8 2.8	胎土はほとんど砂粒を含まない。内外面とも自然粒がかかる。	
Fig. 26-97	包含層	壺	15.8 3.9 — 4.9	精選された胎土。黄褐色。ロクロ成形。 口縁溝跡をわずかにつまみ上げる。底部へラ切り。内外面擦ナデ。	
Fig. 26-98	〃 (V層)	壺	— — — 6.0	チャートの粗粒砂をわずかに含む。淡黃橙色。 高台は八字状。内外面調整の観察不可。	

遺物観察表（石器）

標団番号	出土地点	器種	長軸 短軸 法量 (cm) 厚さ(g)	石材	特徴	備考
Fig. 7-2	ST1	石鍤	9.3 7.9 2.8 248	結晶片岩	扁平な河原石の両端を打ち欠いている。	
Fig. 7-3	タ	叩石	17.7 5.1 3.2 555	緑色片岩	棒状を呈し、一方の端部に巻きな使用痕が認められる。	
Fig. 13-23	SK11	石包丁	6.2 3.4 0.8 13.6	サヌカイト	スクレイバーの可能性もある。両面から刃部を造り出す。	
Fig. 13-24	タ	タ	10.1 4.9 1.0 86.1	紅褐色片岩	均正の長方形を呈し、四側縁すべてに調整痕が認められる。	
Fig. 22-74	SK20	石鎚	2.4 1.5 0.4 1.0	サヌカイト	凹基式で底部の一端を欠く。	
Fig. 27-99	包含層	石包丁	8.1 4.2 0.7 33.0	結晶片岩	長方形を呈し、四側縁に調整が認められる。	
Fig. 27-100	タ (V層)	タ	9.1 4.8 0.6 49	緑色片岩	タ	
Fig. 27-101	包含層	タ	5.4 4.5 0.5 21.9	結晶片岩	長方形を呈するが、短軸縁がわずかに凹状を呈す。一部欠損。	
Fig. 27-102	タ	タ	6.9 3.7 0.7 34.0	紅褐色片岩	略長方形で短側縁に抉り、四側縁共に調整痕あり。	
Fig. 27-103	タ (N層)	タ	6.9 4.3 0.9 36.0	結晶片岩	タ	
Fig. 27-104	包含層	石鍤	14.0 7.3 1.8 264	緑色片岩	河原石の削片を利用して、長軸縁の中央部を打ち欠く。	

# 写 真 図 版

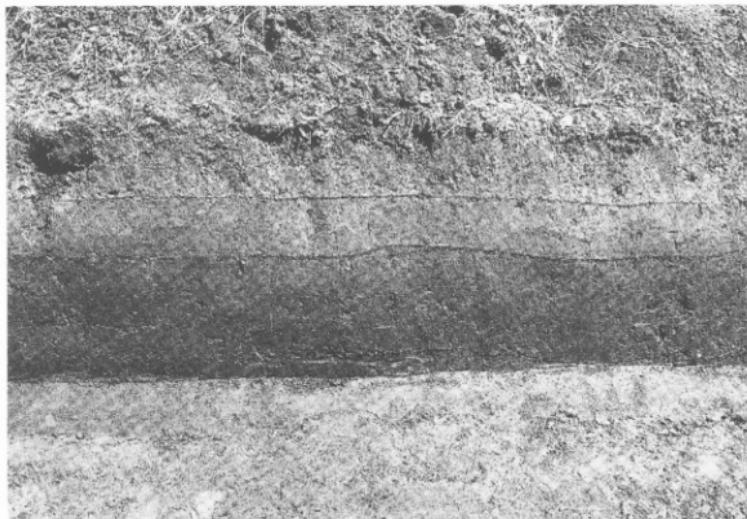


試掘調査（西から）

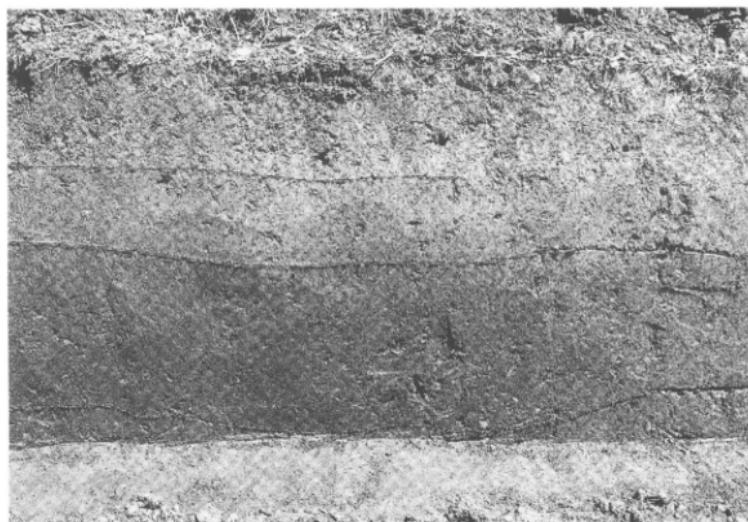


同上（南から）

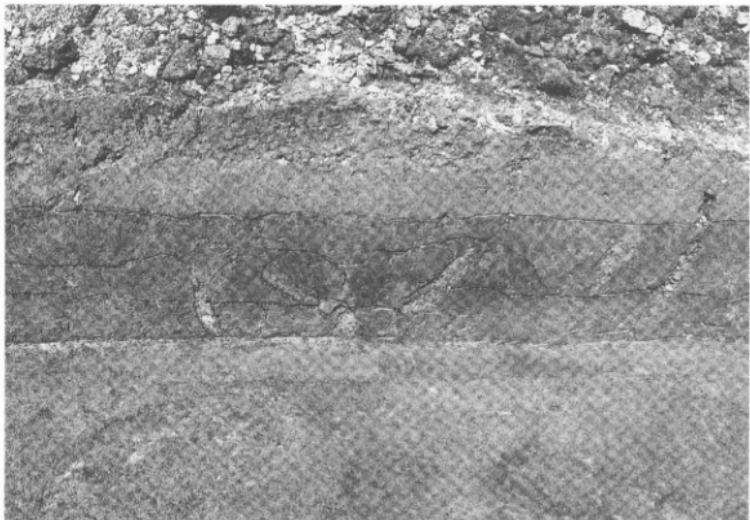
PL 2



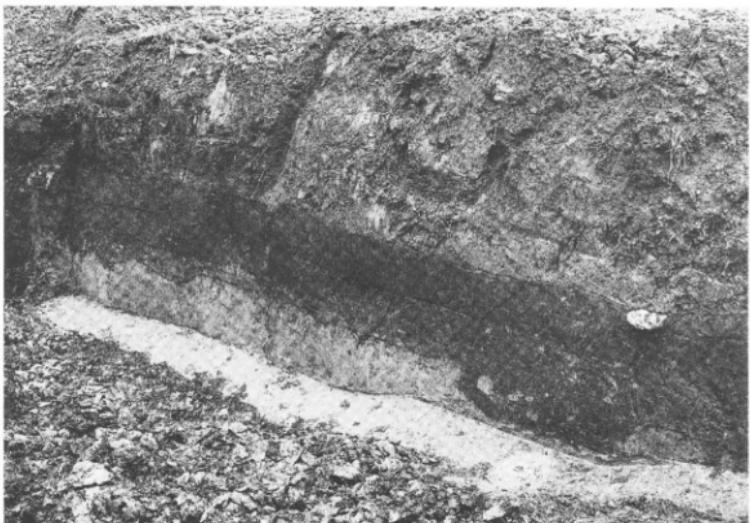
東区北壁セクション



同上

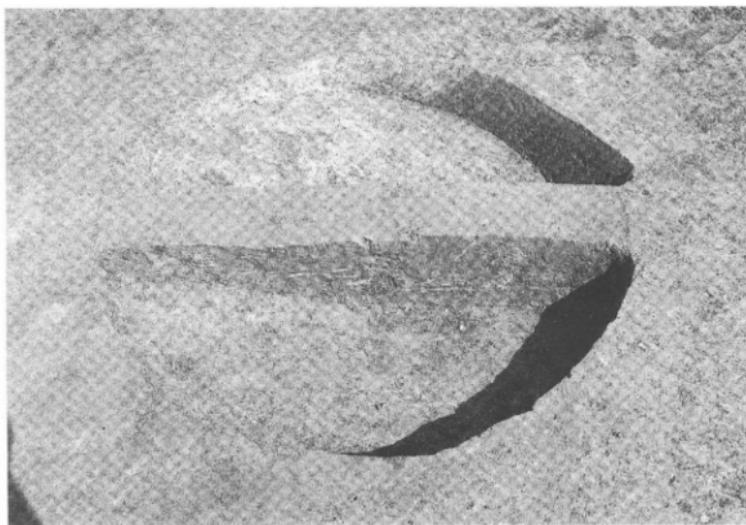


東区西壁 (N-S) セクション

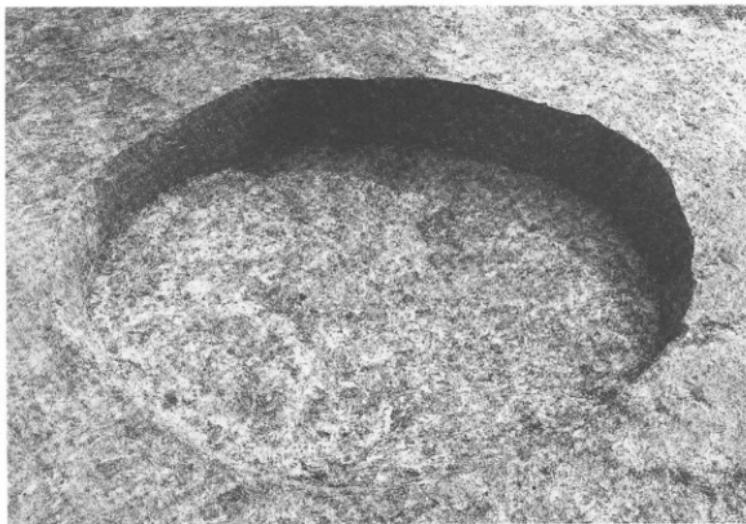


同上

PL 4

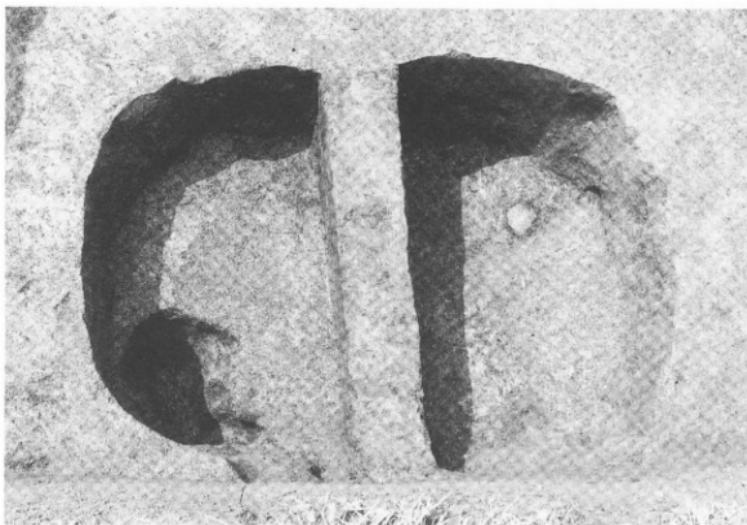


SK 1 セクション

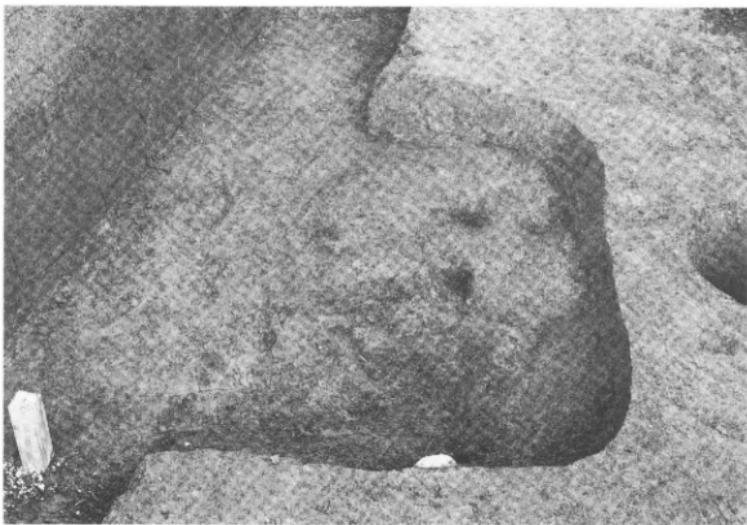


SK 1 完掘状況

PL 5

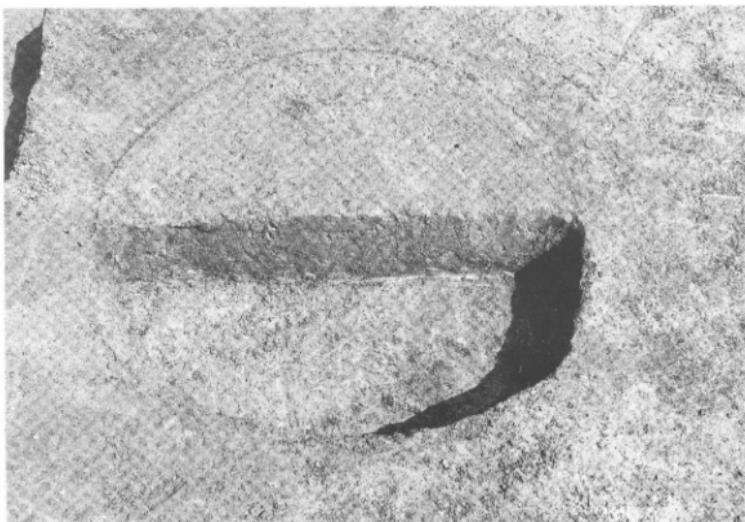


SK 3

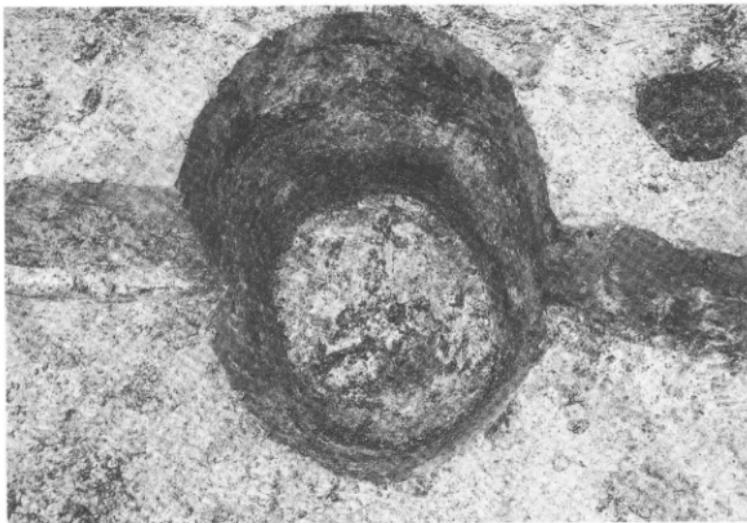


SK 4 完掘状况

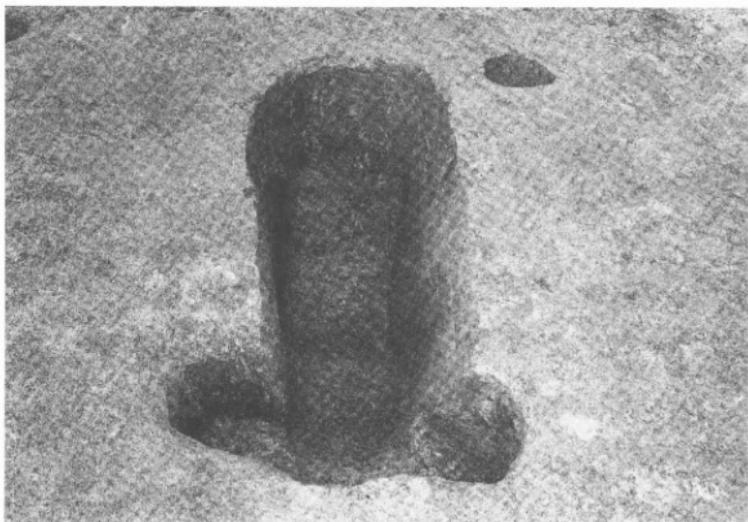
PL 6



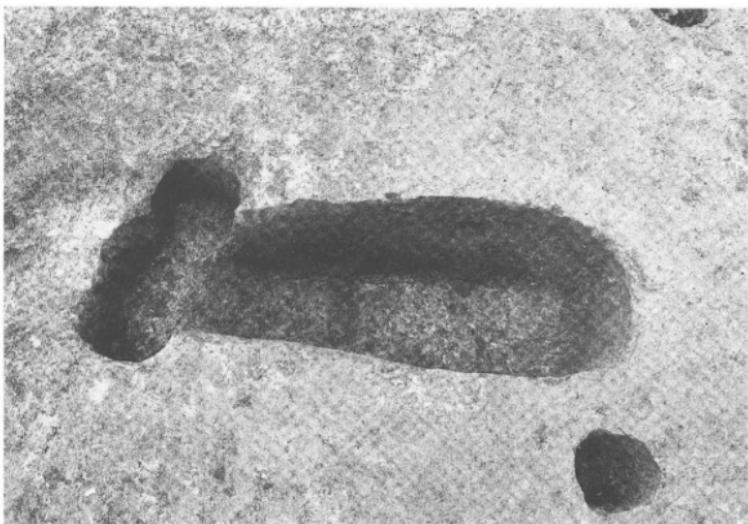
SK 5 半截状况



SK 9 完损状况

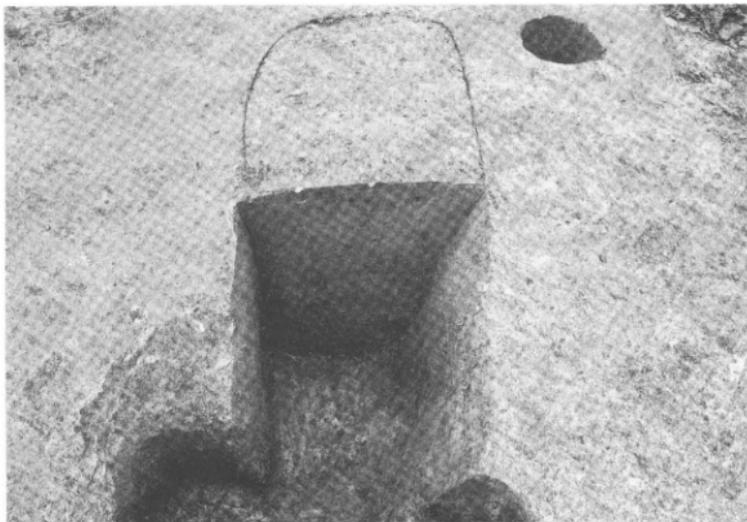


SK 11完掘状況（南から）



同上（東から）

PL 8



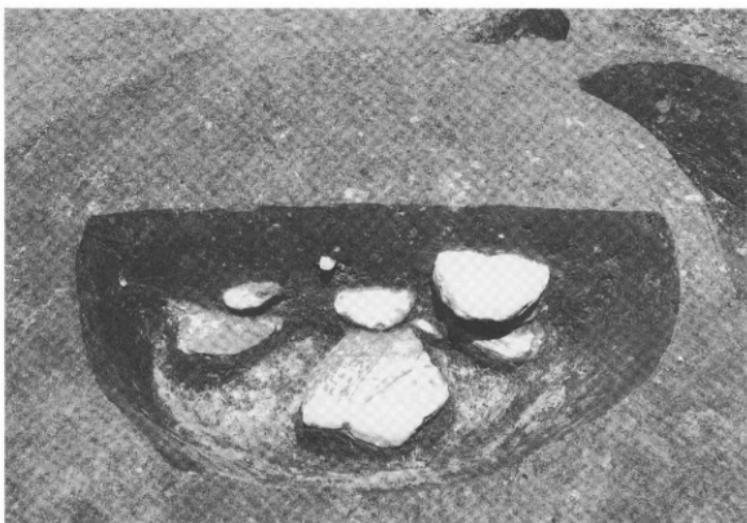
SK 11セクション



同上

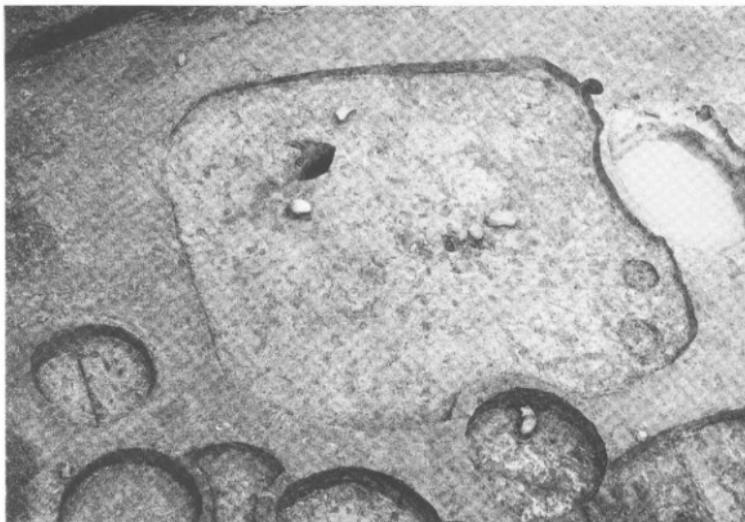


SK 17完掘状況

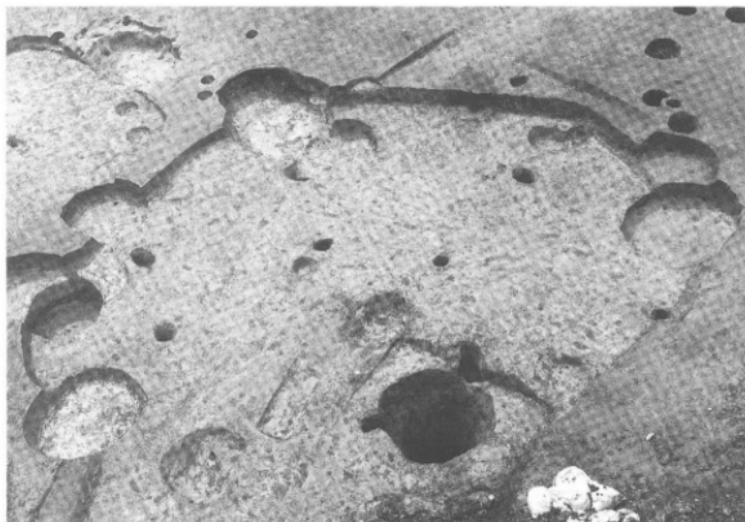


SK 18半截セクション

PL 10



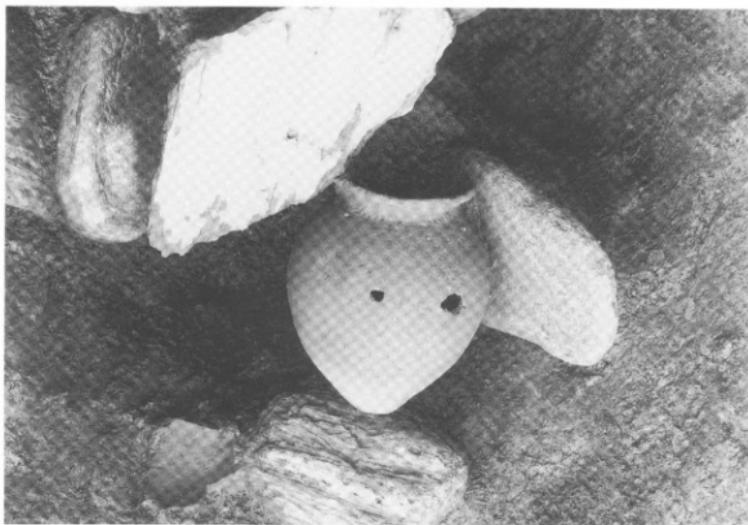
ST 1 完擺状況



ST 2 完擺状況

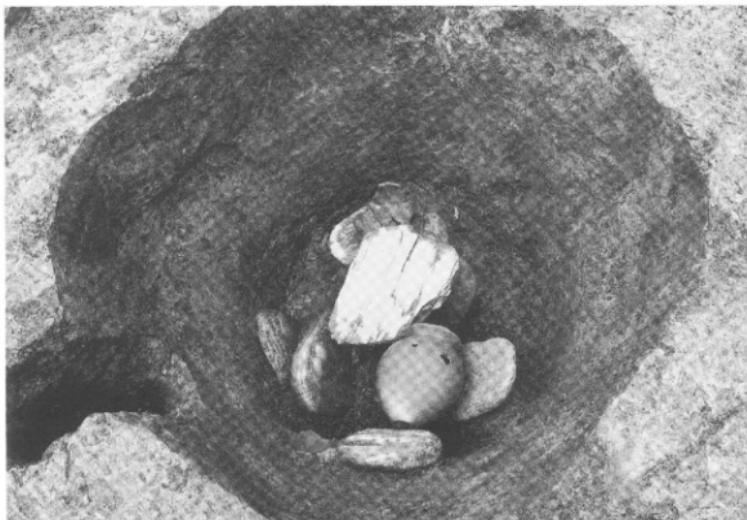


SK 32遺物出土状況（上層）



同上（中層）

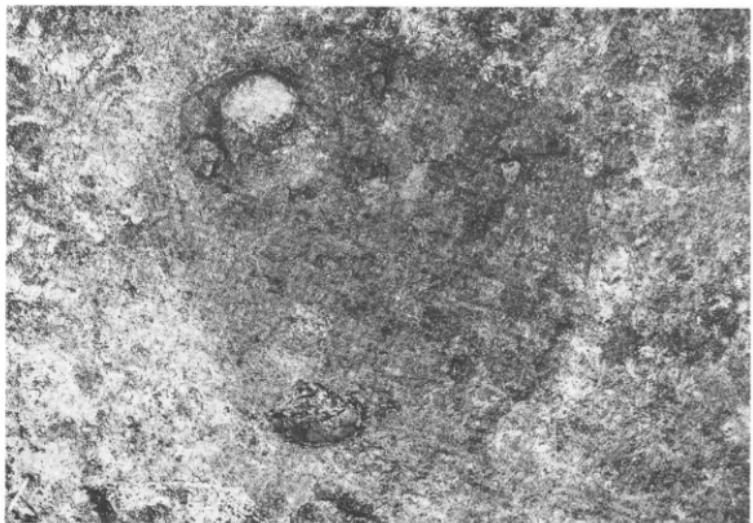
PL 12



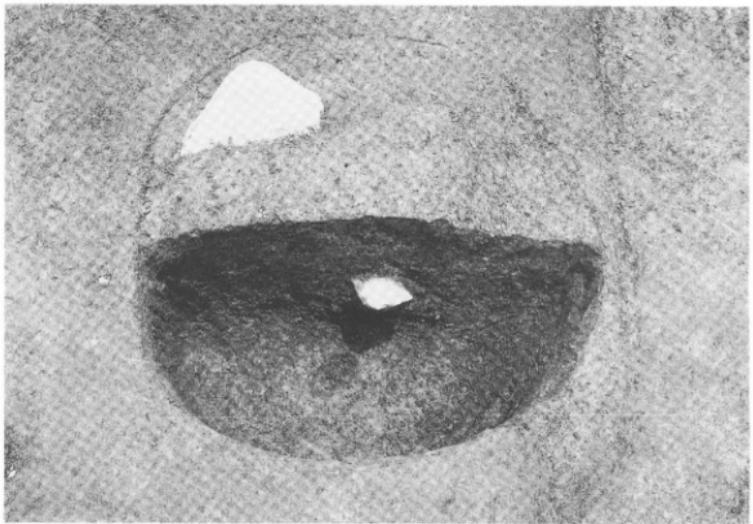
SK 32遺物出土狀況（中層）



SK 32完掘状况



SK 33検出状況



P 13半截状況